

茨城県結城郡八千代町大字新井

小次郎内遺跡発掘調査報告書

—農業集落排水事業川西南部地区処理施設建設に伴う遺跡の発掘調査—

2007

八千代町
八千代町教育委員会
(株)地域文化財コンサルタント

茨城県結城郡八千代町大字新井

小次郎内遺跡発掘調査報告書

—農業集落排水事業川西南部地区処理施設建設に伴う遺跡の発掘調査—

2007

八千代町
八千代町教育委員会
株地域文化財コンサルタント

序 文

このたび、農業集落排水事業川西南部地区処理施設建設に伴い、八千代町新井に所在する小次郎内遺跡が発掘調査され、その成果を報告書として発行することになりました。今回の調査は、処理施設建設が遺跡の範囲内に計画されたことから、事前に発掘調査をして記録保存を図ったものです。

小次郎内遺跡は、鬼怒川の旧河道沿いに営まれた遺跡です。時代が奈良・平安時代の集落跡ということから、ちょうど古代の鬼怒川が河川改修された頃と時期が重なり、たいへん興味深いものがあります。

調査された範囲は、遺跡全体から見れば小さい部分ですが、堅穴住居跡が発見されるなどたいへん貴重な成果を得ることができました。この報告書が町民の皆さんはじめ、専門の研究者の方々にも活用され、少しでも八千代町の古代の歴史の解明にお役立てできれば幸いに存じます。

最後に、この調査にご理解・ご協力いただきました地元の皆さんはじめ、関係諸機関の方々に厚くお礼申し上げます。

平成19年9月

八千代町教育委員会教育長 高橋昇

例　　言

1. 本書は、茨城県結城郡八千代町大字新井字八反田 66 番地他に所在する小次郎内遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘作業から報告書作成に至る業務は、八千代町から委託を受けた株式会社地域文化財コンサルタントが、八千代町教育委員会の指導のもと実施した。なお、発掘調査に先立ち、八千代町教育委員会が試掘・確認調査を実施した。
3. 調査期間は、下記の通りである。

・試掘調査	平成 17 年 1 月 24 日～平成 17 年 1 月 28 日
・発掘作業	平成 18 年 10 月 25 日～平成 18 年 11 月 24 日
・整理作業	平成 18 年 12 月 1 日～平成 19 年 2 月 15 日
・報告書作成	平成 18 年 7 月 1 日～平成 19 年 9 月 28 日
4. 発掘調査における調査担当者等は、下記のとおりである。

・調査担当者	齋藤 洋（株式会社地域文化財コンサルタント）
・調査員	遠藤雄一郎（株式会社地域文化財コンサルタント）
・調査作業員	野村浩史 深山恒男 横勝雄 川村理華 占澤 敦 中沢光男 川村勇一 川村晴江 古澤昭子 北島泉子 小野崎文男
5. 本書の編集執筆等については、下記のとおりである。

・編　　集	山野井哲夫（八千代町教育委員会） 齋藤 洋 小川将之
・執　　筆	山野井哲夫 齋藤 洋 小川将之
・整理作業員	野村浩史 増田香里
6. 本調査にかかる記録類及び出土遺物は、八千代町教育委員会が保管している。
7. 試掘・確認調査から発掘調査及び本書の刊行に至るまで、下記の方々のご協力・ご指導を賜った。記して感謝の意を表する。（敬称略・順不同）

鶴見 定 井上勝男 川村公男 飯ヶ谷正一 飯ヶ谷俊一
茨城県教育庁文化課 八千代町上下水道課 八千代町生涯学習課 有限会社久中建設

凡　　例

1. 第 2 図は国土地理院 5 万分の 1 地図「小山・水海道」を縮小して使用した。
2. 第 3 図は八千代町発行「八千代町都市計画図 1 万分の 1」を使用した。
3. 第 4 図は茨城県教育委員会発行「茨城県遺跡地図 1/25,000」を縮小して使用した。
4. 実測図の縮尺は各図面に記した。
5. 遺物観察表中の法量は、〔 〕は残存値、() は推定値を示す。

目 次

本文目次

序 文.....	八千代町教育委員会教育長 高橋 昇
例 言・凡 例	
目 次	
第1章 経 過	
第1節 調査の経過.....	1
第2節 発掘作業の経過.....	1
第3節 整理作業の経過.....	2
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境.....	3
第2節 歴史的環境.....	5
第3章 調査の概要	
第1節 試掘・確認調査の概要.....	8
第2節 発掘調査の概要.....	9
第3節 層序.....	10
第4章 遺構と遺物	
第1節 坪穴住居跡.....	15
第2節 性格不明遺構.....	24
第3節 土坑.....	24
第4節 溝状遺構.....	32
第5節 遺構外出土遺物.....	32
第5章 総 括.....	34
報告書抄録	
写真図版	

挿図目次

第1図 農業集落排水事業処理施設建設概要図.....	1
第2図 遺跡位置図.....	4
第3図 遺跡周辺地形図.....	5
第4図 周辺遺跡分布図.....	6
第5図 試掘・確認調査区位置図.....	8
第6図 試掘・確認調査実測図.....	9
第7図 基本堆積土層図.....	10
第8図 調査区全測図.....	11
第9図 1号住居跡.....	15
第10図 1号住居跡出土遺物.....	16
第11図 2号住居跡・出土遺物(1).....	17
第12図 2号住居跡出土遺物(2).....	18
第13図 3号住居跡.....	19
第14図 3号住居跡出土遺物.....	20
第15図 4号住居跡・出土遺物.....	21
第16図 5号住居跡・出土遺物(1).....	22
第17図 5号住居跡出土遺物(2).....	23
第18図 性格不明遺構出土遺物.....	23
第19図 性格不明遺構.....	24
第20図 6～8・10・14・15号上坑 山上遺物.....	29
第21図 20・24・27号土坑出土遺物.....	30
第22図 性格不明遺構・1～34号土坑・ 1号溝.....	31
第23図 遺構外山上遺物.....	33
第24図 木遺跡と周辺遺跡より検出の住居跡.....	34

表目次

第1表	1号住居跡出土遺物観察表	16	第6表	性格不明遺構出土遺物観察表	24
第2表	2号住居跡出土遺物観察表	18	第7表	6~8・10・14・15・20・24・27号 土坑山上遺物観察表	30
第3表	3号住居跡出土遺物観察表	20			
第4表	4号住居跡出土遺物観察表	22	第8表	遺構外山上遺物観察表	32
第5表	5号住居跡出土遺物観察表	23			

写真図版目次

写真図版 1	調査区全景 1		写真図版 5	4号住居跡全景	
	調査区全景 2			4号住居跡セクション	
写真図版 2	1号住居跡全景			4号住居跡カマドセクション	
	1号住居跡セクション			4号住居跡カマド遺物出土状況	
	1号住居跡遺物出土状況			4号住居跡調査状況	
	1号住居跡カマドセクション		写真図版 6	5号住居跡全景	
	1号住居跡調査状況			5号住居跡セクション	
写真図版 3	2号住居跡全景			5号住居跡カマド全景	
	2号住居跡セクション			5号住居跡調査状況	
	2号住居跡カマドセクション			5号住居跡調査状況	
	2号住居跡カマド遺物		写真図版 7	性格不明遺構セクション	
	2号住居跡調査状況			性格不明遺構全景	
写真図版 4	3号住居跡全景			5号土坑セクション	
	3号住居跡セクション			15号土坑セクション	
	3号住居跡遺物出土状況			7・14・21・22・29・30号土坑 土坑遠景(1)	
	3号住居跡カマドセクション			土坑遠景(2)	
	3号住居跡カマド遺物出土状況			1号溝	
写真図版 8	1~3号住居跡出土遺物		写真図版 8	1~3号住居跡出土遺物	
写真図版 9	4・5号住居跡、 上坑山上遺物				
				6~8・10・14・15・20・24・27号 上坑山上遺物	
写真図版 10	性格不明遺構、遺構外出土遺物				

第1章 経過

第1節 調査の経過

平成16年8月31日、八千代町上下水道課から農業集落排水事業川西南部地区処理施設建設にあたり、埋蔵文化財の庶会があった。この地域には、平成11年から12年にかけての分布調査によって、奈良・平安時代の集落跡である小次郎内遺跡が確認されていることから、その取扱いについて協議を開始した。

まず、遺構の状況を確認するため、平成17年1月24日から1月28日かけて、八千代町教育委員会が試掘・確認調査を実施した。その結果、住居跡の可能性のある堅穴状遺構3基、土坑9基を確認し、平安時代の土師器や中世のかわらけ等の遺物も出土した。

処理施設建設は、建物部分は地下7.3mまで及ぶが、実際の工事では建物の周囲約2mの範囲全体を深さ約2mまで掘削することになり、完全に遺構が掘削されるため、その範囲は隣接する畠も含め発掘調査し記録保存することになった。その他の敷地はアスファルト舗装及び芝張りされるが、保護層を確保することができ、遺構は現状保存されることになった。

発掘調査は八千代町と郷地域文化財コンサルタントで委託契約し、八千代町、八千代町教育委員会及び郷地域文化財コンサルタントの三者で埋蔵文化財発掘調査の協定書を結び、平成17年12月26日、土木工事の通知を提出した。平成18年1月16日、茨城県教育委員会から「発掘調査」及び「工事立会」の通知を受け、平成18年9月11日発掘調査の届出、平成18年10月25日から発掘調査を開始した。

(山野井哲夫)



第1図 農業集落排水事業処理施設建設概要図

第2節 発掘作業の経過

平成18年10月下旬より表土掘削を開始し、月内に終了した。

表土掘削中に降雨の影響による水の湧出があり、調査区内に排水溝を設置し対処した。しかし、湧出量が多かったため、遺構検出作業を引き続き実施することは困難と判断し、水の湧出が収まるまで一時作業を中断させた。

同年11月上旬より調査を再開し、遺構検出作業を行った。遺構は竪穴住居跡が5軒、土坑34基、性格不明遺構1基、溝状遺構1条が検出された。

遺構は重複関係にあるものが数箇所でみられたため、平面及び土層断面にて精査を行い、その重複関係の把握に努め調査を進行させていった。

11月中旬、遺構の調査が終了し、遺構全景の写真撮影を実施して発掘作業は終了した。

この後の下旬には現地説明会を開催し、多くの方々が訪れた。

翌日には現場施設の撤去を行い、同時に調査区内の埋め戻しを行い、調査が完了した。



遺構検出状況1 南から



遺構検出状況2 南から



遺構検出作業 西から



現場説明会 南から



遺構調査 西から

第3節 整理作業の経過

平成19年1月中旬から基礎整理作業として遺物の洗浄を開始し、遺物が乾燥した後に注記を行った。また、並行して遺構実測図面の整理を行い、グラフィックソフトを使用してトレースを実施し、デジタルデータとして保存を行い、同月下旬に作業を終了した。

同年1月下旬から遺物の接合・補強を行い、報告書掲載用実測対象遺物の選択を行った。引き続き遺物の実測及び実測図面のトレースを行い、併せて遺物の写真撮影を実施した。また、現場で撮影した写真的整理を行い、報告書掲載用写真的選択を実施した。

平成19年8月上旬からは上記の資料を基に、報告書の作成をDTPソフトウェアを用いて行い、同年9月28日に報告書の刊行に至った。



第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

八千代町は、関東平野のはば中央、茨城県県西地区に位置し、東は南流する鬼怒川に接している。北西部から南東部にかけて洪積台地である結城台地からなり、東部は沖積地である鬼怒川右岸の低地、南部は飯沼川の低地から結城台地の奥深くまで続く開析谷が形成されている。

小次郎内遺跡は、鬼怒川低地にあたる八千代町川西地区の大字新井に所在する。南側に幅約120mの鬼怒川旧河道を臨む標高24mから26mの台地上に立地する。現状は、鬼怒川旧河道の低地は水田、台地上は畠として利用されている。

この旧河道跡は、神護景雲2年(768)に河川改修された跡と考えられている場所で、旧河道沿いには本遺跡も含め奈良・平安時代の遺跡が数多く立地する。

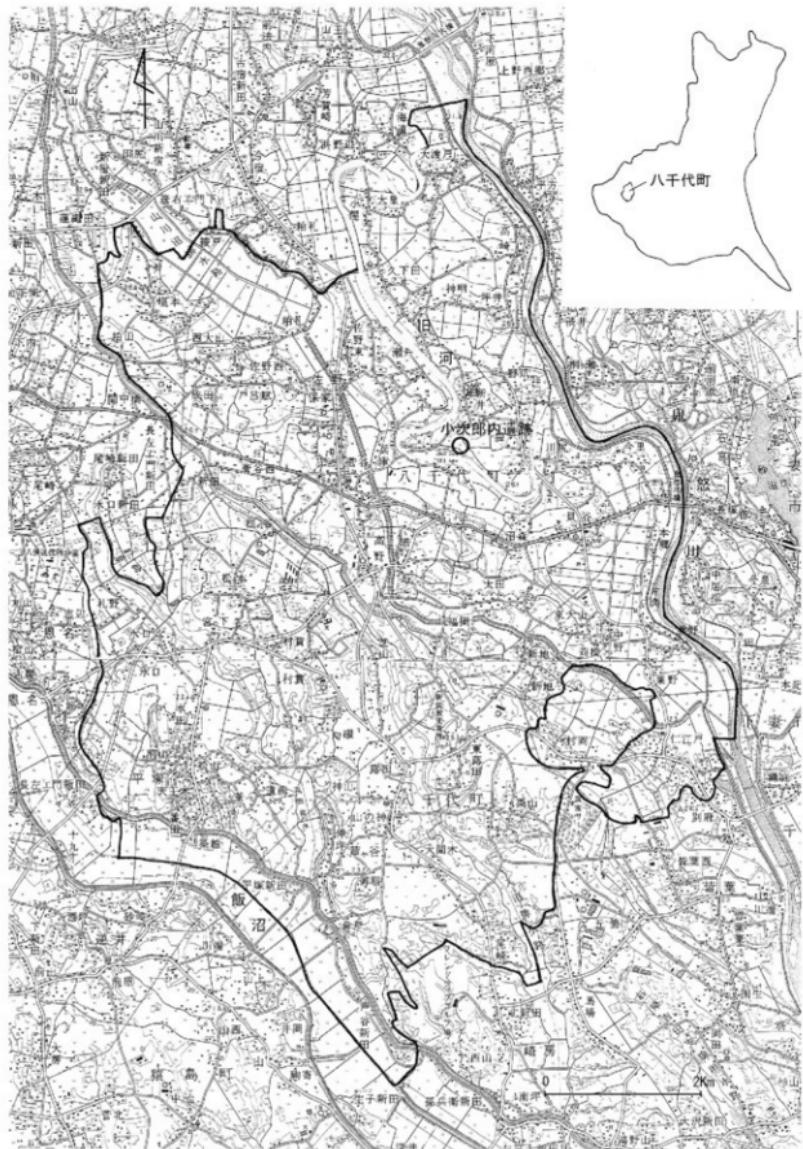
(山野井哲夫)

*旧河道跡

古代の鬼怒川は、八千代町の大渡戸付近で大きく西へ向きを変え、蛇行しながら南流し、八町で急激に東に屈曲し、袋・川尻あたりから北上し、野爪付近で現在の流れに戻る。そこから少し南流して東へ向きを変え、下妻市の砂沼の南側から現在の糸線川を通り、小貝川に合流していた。この鬼怒川の流路が、古代の常陸国と下總国の国境となっていた。

*参考文献

- 『八千代町史 通史編』八千代町史編さん委員会 1987.3



第2図 遺跡位置図（国土地理院5万分の1地図を80%縮小）



第3図 遺跡周辺地形図（八千代町都市計画図1万分の1）

第2節 歴史的環境

八千代町内には、現在 177 か所の遺跡が確認されているが、その多くは結城台地に複雑に入り込んだ谷津田沿いに立地し、鬼怒川沿いの低地に立地する遺跡は 32 か所に過ぎない。そのほとんどの遺跡が、鬼怒川の旧河道跡が残る八千代町川西地区に集中している。

この地域で縄文時代に遡る遺跡は、現在のところ野爪鹿嶋神社周辺遺跡（No.168）のみで、古墳時代になつても 5 遺跡を数えるだけである。これらの遺跡が立地する場所は、鬼怒川低地の中であっても比較的標高が高くなっている場所である。律令期になると、遺跡数は 28 か所と急激に増加する。これは、鬼怒川の河川改修によることが大きな要因と考えられている。

『続日本紀』の神護景雲 2 年（768）8 月 19 日の条に、鬼怒川の河川改修に関する記録があるが、要約すると次のようになる。

「下總国司は、毛野川（鬼怒川）の度重なる氾濫によって口分田が被害を受けるため、河川改修を申請していたが、常陸国側では、新河川の予定地に神社や民家があるため、改修工事は延期されていた。しかし、毎年のように鬼怒川の洪水によって一郡の口分田二千余町が荒廃するに至って、下總国結城郡小堀郷小鳴村から常陸国新治郡川曲郷受津村にかけて一千丈の改修工事が着工された。」

この改修された場所が、現在の八千代町川西地区に残る旧河道跡と考えられている。改修工事が延期された理由に「神社」があることが記されているが、この地域で鬼怒川に隣接した創建の古い神社は、大同元年（806）藤原音麻呂の創建と伝えられる野爪の鹿嶋神社がある。時期的にズレがあるが、記録に出てくる「神社」との関わりが考えられる。また被害にあった「一郡の口分田」とは、下總国岡田郡の口分田と考えられるが、この地域の低地遺跡は、現在わずかに 4 か所しか確認されていない。洪水によって埋没している可能性が考えられる。改修によって鬼怒川の西侧に位置することとなった地域（川西地区）は、改修後も国境は変わら



第4図 周辺遺跡分布図（茨城県遺跡地図 1/25,000 を 80% 縮小）

- （ ）内は遺跡の時代：縄=縄文時代、古=古墳時代、奈平=奈良・平安時代、中=中世、近=近世
- | ○旧河道右岸 | ○旧河道左岸 | ○鬼怒川右岸 |
|--------------------|--------------------|--------------------------|
| 110 漢戸井上遺跡（奈平・中近） | 175 大里北遺跡（奈平・中近） | 176 六方寺遺跡（奈平） |
| 111 漢戸井下遺跡（奈平・中近） | 174 小畠遺跡（奈平・中近） | 177 宮西遺跡（奈平・中近） |
| 112 青木田遺跡（近） | 159 滝上遺跡（古・奈平） | 171 後山北遺跡（奈平・中近） |
| 113 沼畑前遺跡（奈平・中） | 160 久下日本道遺跡（奈平・中近） | 172 後山南遺跡（奈平・中近） |
| 028 沼森本田遺跡（奈平・中） | 161 川村遺跡（奈平） | 173 出羽内遺跡（奈平・中近） |
| 029 小魔前遺跡（古・奈平・中近） | 162 竜山遺跡（奈平・中） | 177 内海道遺跡（奈平・中） |
| 030 小魔後遺跡（古・奈平・中） | 163 小次郎内遺跡（奈平・中近） | 167 八幡前遺跡（奈平） |
| 031 川尻北遺跡（古・奈平・中） | 164 宮東遺跡（奈平） | 168 野爪鹿鳴神社周辺遺跡（縄・古・奈平・中） |
| | | 032 寺ノ前遺跡（円福寺跡の推定地） |

ことなく常陸国とされ、昭和30年合併により八千代村となるまで、川西地区は真壁郡に属していた。

改修後の旧河道跡は、耕地として開発されるに伴い、遺跡が成立してきたと考えられる。旧河道左岸の常陸国側には、本遺跡を含め大里北遺跡（No.175）、小里遺跡（No.174）、遠上遺跡（No.159）、久下田本田遺跡（No.160）、堂山遺跡（No.162）、宮東遺跡（No.164）など、旧河道右岸の下総国側には、瀬戸井上遺跡（No.110）、瀬戸井下遺跡（No.111）、沼畑前遺跡（No.113）、沼森本田遺跡（No.028）、

川尻北遺跡（No.031）などがあり、現在の集落とも重なり規模の大きい遺跡が當まっていた。また、鬼怒川右岸に立地する内海道遺跡（No.177）は、県道拡幅に伴い茨城県教育財団が平成15年に発掘調査を実施した遺跡である。調査は26m²と狭い範囲であったが、奈良時代及び平安時代の堅穴住居跡が各1軒確認され、土器器の壺、甕、碗などが出土した。

10世紀になると、八千代地方も平将門が活躍した舞台となる。『將門記』には多くの地名が登場してくるが、八千代地域では芦津江（八千代町芦ヶ谷）、栗栖院常羽御殿（八千代町栗山）、堀越の渡（八千代町仁江戸）、広河の江（飯沼付近）などの地名が見られる。また承平5年（935）に平将門と平良正が戦った新治郡川曲村は、常陸国と下総国の国境地帯であった川西地区といわれている。

川西地区には、高崎の福寿院、八町の新長谷寺、今里の円福寺跡など、中世に遡る寺院がある。高崎の福寿院には、鎌倉時代初めに制作された木造阿弥陀如来坐像や鎌倉時代末の絹本着色両界曼荼羅図などが残されている。

八町の新長谷寺は、寺伝によると、貞永元年（1232）源頼朝に仕えていた結城朝光が、鎌倉から持ち帰った十一面觀音菩薩像（＊）をこの地に安置するため、堂宇を建立させたことが寺の由来と伝えられている。この新長谷寺一帯は鬼怒川の旧河道が急激に屈曲し、北・南・西側を低地に囲まれた所で、奈良・平安時代から中世にかけての堂山遺跡（No.162）が確認されている。南北朝時代には、この地形を利用して砦も築かれていた。北朝側の武将高師冬が、南朝側の駒城（下妻市）を攻略するための拠点として、四つの砦を築いたとされるが、そのうちの一つである八丁目の砦が現在の八町新長谷寺一帯の地と考えられている。

現在下妻市にある円福寺は、もと八千代町今里にあった。『円福寺記録』（円福寺藏）によれば、足利尊氏の兄高義が、下総國大方郡今里郷の香取神社の傍らに寺院建立を願っていたが果たされず、その後鎌倉公方足利氏満によって、応永元年（1394）に香取神社の別当寺として創建されたと伝えられている。それから南北朝時代から戦国時代にかけて、鎌倉公方、古河公方の「祈願所」として外薈されてきたが、元亀2年（1571）北条氏の侵攻により円福寺は焼失し、下妻の多賀谷氏によって現在の地に移建された。八千代町の今里には香取神社が残っているが、周辺は奈良・平安時代から中・近世にかけての寺ノ前遺跡（No.032）が確認されており、中世寺院円福寺跡の推定地と考えられている。

（山野井哲夫）

*八町の新長谷寺の本尊である十一面觀音菩薩立像は、鎌倉時代の制作と考えられていたが、平成14年の保存修理の際、内側リ部の墨書きから、制作年が貞和6年（1350）、仏師名が跡祥であることが確認された。

＊参考文献

- ・『八千代町史 通史編』八千代町史編さん委員会 1987.3
- ・『茨城県遺跡地図・地名表』茨城県教育委員会 2001.3
- ・『内海道遺跡』（財）茨城県教育財団 2004.3
- ・『八千代町の文化財』八千代町教育委員会 2007.3



旧河遺跡より次郎内遺跡と筑波山を望む

第3章 調査の概要

第1節 試掘・確認調査の概要

試掘調査は、処理施設の敷地となる4筆（約2,000m²）を対象とし、幅2m、長さ10mの調査区を9か所設定して実施した。この場所は遺跡として確認する以前に、薺ヶ浦用水の配管が敷設されており、試掘調査中7トレンチは、表上除去の段階で配管敷設にかかる砂層が露出したため、調査区から除外した。

調査の結果、2・3・5・6・8トレンチから上坑9基、竪穴状の遺構3基を確認した。土層の基本的な堆積状況は、①表土層、②暗褐色土層、③黄褐色土層、④ローム層、⑤明褐色粘土層である。遺構確認面は③黄褐色土層上面で、地表から45cm～50cmの深さである。なお、⑤明褐色粘土層で地表から約1.2mのところで水が湧き出てきた。

竪穴状遺構は3トレンチから2基、5トレンチから1基確認した。5トレンチの竪穴状遺構は長軸で4～4.5mあり、住居跡と判断された。またこの竪穴状遺構（5号住居跡）の頂上上面から、内面が黒色処理され丁寧に磨かれた上師器の坏片、高台付坏片（第23図7）が出土した。

土坑は、2・5・6・8トレンチから9基確認した。直径1m前後でほぼ円形を呈する。2トレンチの土坑2基について土屑を確認するため深さ約20cmまで半裁したが、覆土は非常に固くしまった土である。

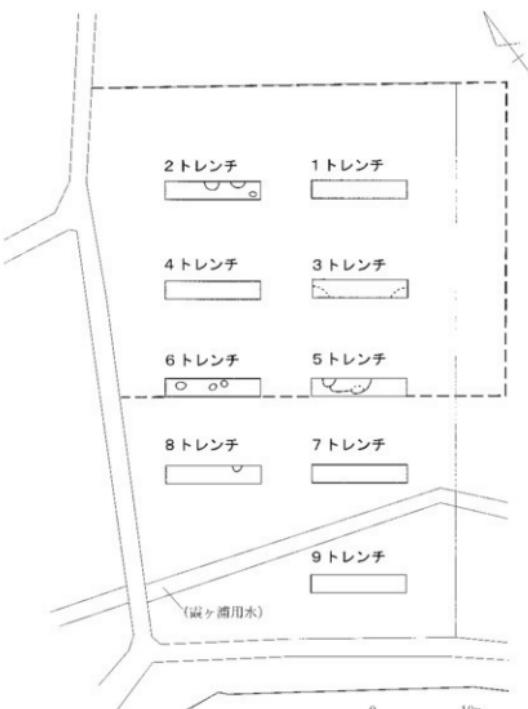
出土遺物は少なくほとんどが小片であるが、5トレンチから出土した上師器や、小片の中には中世の土師質土器やかわらけと思われるものも含まれていことから、今回試掘調査した地域は、平安時代後半から中世にかけての遺跡と判断された。竪穴状遺構については、平安時代の住居跡、あるいは中世の遺構の可能性も考えられる。また土坑については、覆土が非常に固くしまっており人為的に埋め戻されたと考えられ、調査区域全体に確認できたことから、獨立柱建物跡の存在も想定された。発掘調査にあたっては、これら竪穴状遺構及び土坑の性格を確認することが大きな目的となった。

（山野井哲人）

参考資料

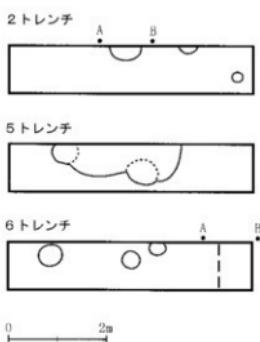
・『試掘調査報告書』

八千代町教育委員会 2005.3

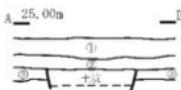


第5図 試掘・確認調査区位置図 (--- 発掘調査範囲)

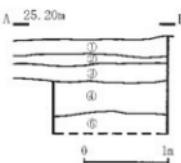
調査区平面実測図 (1/200)



2 レンチ土層断面図 (1/60)



6 レンチ土層断面図 (1/60)



第6図 試掘・確認調査実測図

第2節 発掘調査の概要

調査は、眼下に鬼怒川の旧河道を臨む左岸台地上に広がる遺跡の南部分において実施されたものである。調査区の面積は1,320 m²で地勢はほぼ平坦であり、標高は24～26 mを有する。堆積土層は、畑とし利用されていたため表土は耕作土となり、これを除去した段階で粘性を帯びた黄褐色土層となる。遺構検出面はこの黄褐色土層であるが耕作により上部を削平されているものと判断される。

検出された遺構は、平安時代に當まれた堅穴住居跡5軒、性格不明遺構1基、土坑34基、近世の所産とみられる溝状遺構1条で、調査区の全域にわたって分布する。堅穴住居跡の平面形態はやや歪みをもった方形であり、カマドを通る主軸方向が長い、いわゆる縦長の長方形で占められていた。さらに、カマドの向って左側には平面方形で掘り込まれた張り出しが認められ、本遺跡における特徴的な構造となっている。主軸方向はN-10°-EとN-98°-120°-Eに大別でき、カマドの形態も煙道を短く取るものと長く戸外へ掘り込む二者がみられた。土坑は調査区の中央から南東へかけて比較的集中しているが、規則性はみいだせない。平面形態は円形ないし橢円形で、径及び深度が1 mを超えるものが多く、井戸の可能性のある土坑も確認された。土坑は、住居跡と共に集落を構成したとみられるが、重複関係が認められることからも数次期にわたる遺跡の機能時期が明らかとなっている。

遺物は収納箱4箱分で、古墳時代前期の所産と考えられる上師器（器台・甕）、土製品（手捏土器）、古墳時代後期～奈良・平安時代の所産と考えられる上師器（甕）、石製模造品（有孔円板）が含まれるもの、主体となるのは平安時代の土器類で、土師器（壺・耳皿・壇・甕）、須恵器（瓶・甕）、瓦、石製品（砥石・支脚）、鉄製品（不明品）が出土している。これらの遺物を基にすると、住居跡には9世紀後葉～11世紀前葉の年代が与えられ、今回はこの時期に當まれた集落の一部を調査したものである。



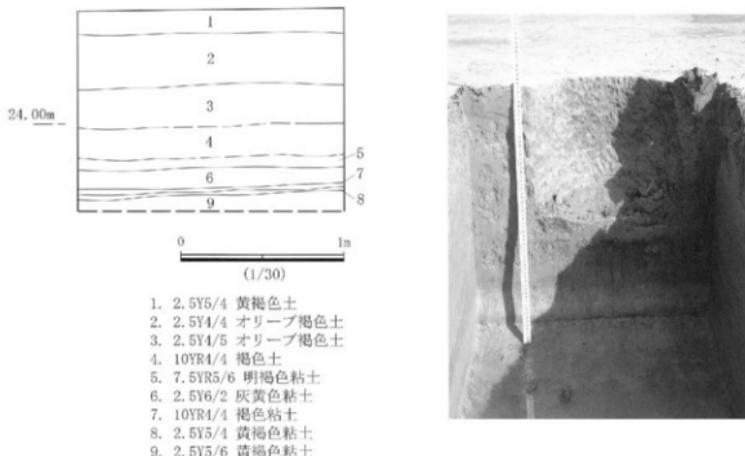
発掘調査前 筑波山を望む

第3節 層序

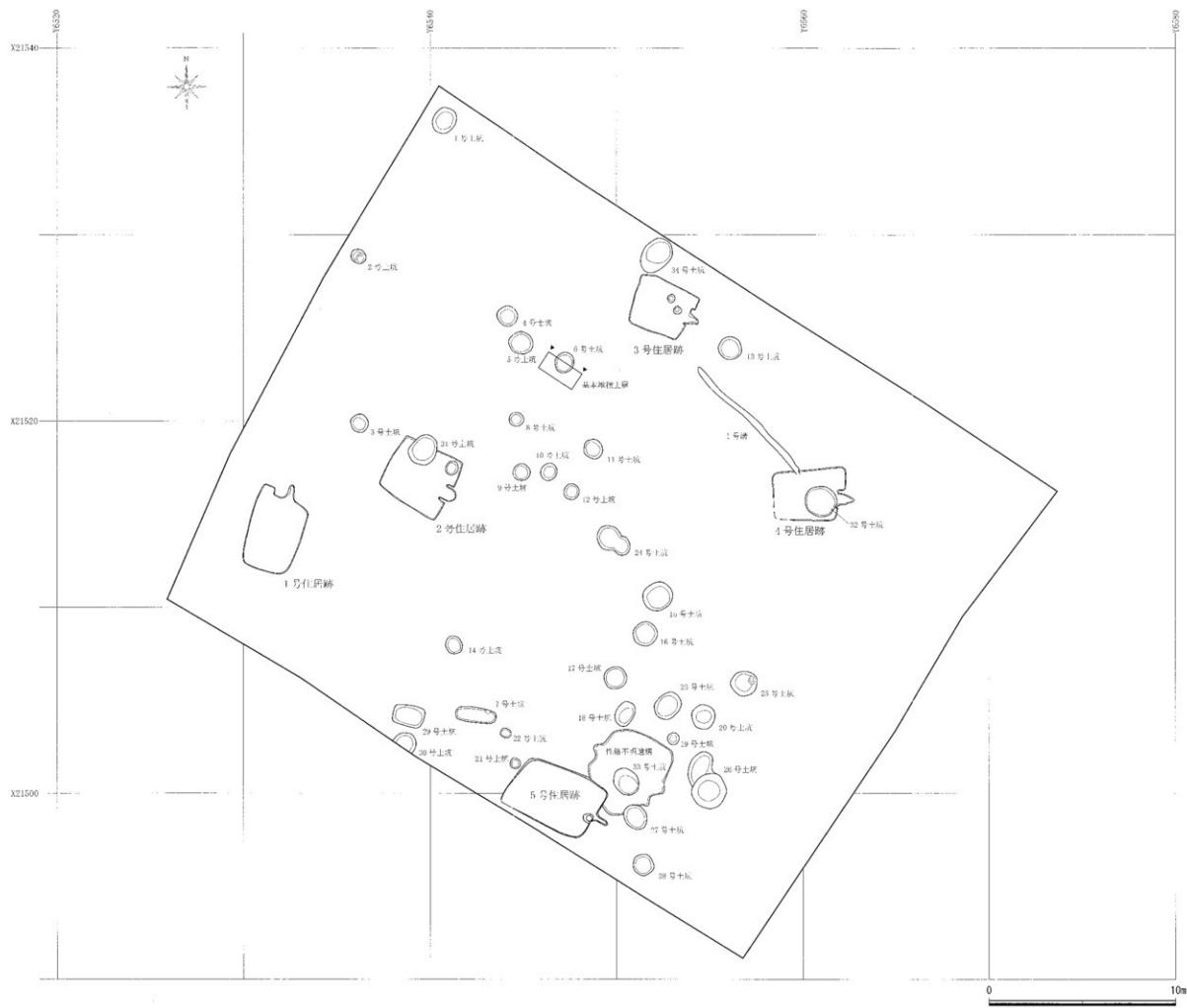
基本堆積土層の観察は調査区の中央西寄りにて行った。表土は灰褐色の耕作土で、「第7図 基本堆積土層図」は表土を除去した状態での掲載である。

遺構検出面は1層（黄褐色土層）の上面であり、水分を多く含むと粘性が非常に強くなり、乾燥すると硬化性が増大する土質であった。

下層になるにつれ土壌は水分を多く含有し、5層以下では水の湧出がみられた。



第7図 基本堆積土層図



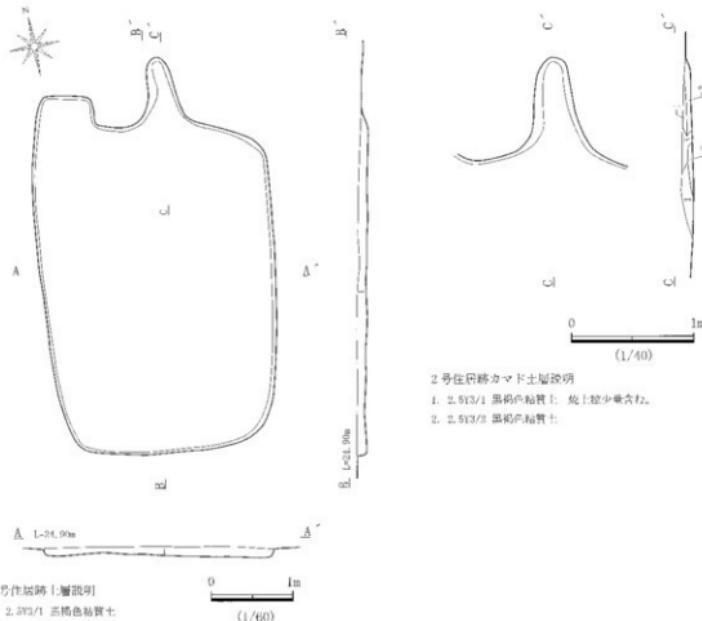
第8図 調査区全測図

第4章 遺構と遺物

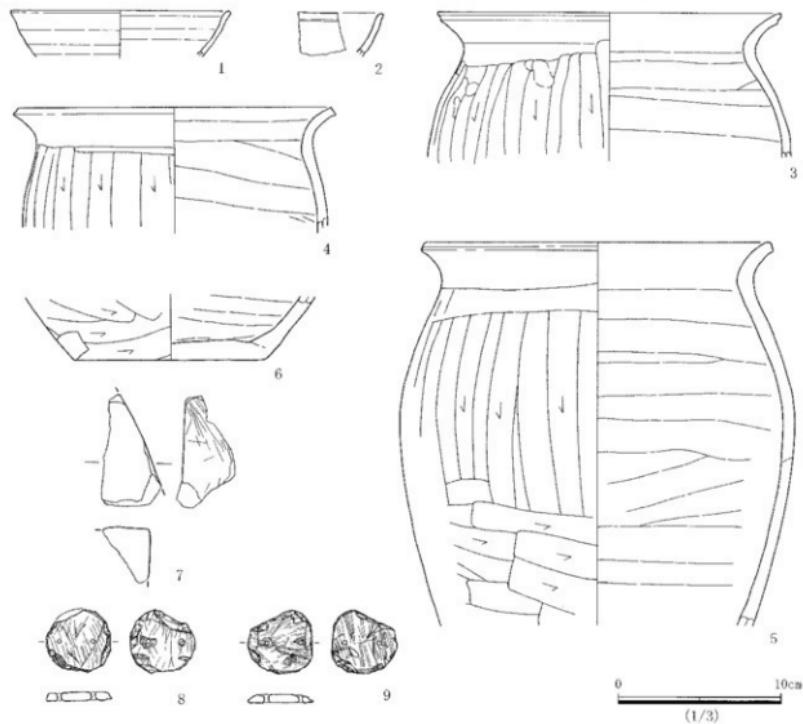
第1節 堅穴住居跡

1号住居跡（第9・10図、写真図版2・8）

調査区の南西部に位置し、北東の2号住居跡と4mの距離をとる。黄褐色土層を基盤として構築され、平面形態は主軸方向が長い隅角に丸味をもった長方形で、カマドが付設された北壁の西角が平面方形に張り出す。規模は長軸が南北軸で3.95m、東西軸2.90m、確認面からの深さは10~14cmを測る。張り出し部は、東西0.73m、南北0.35mである。主軸方向はN-10°-Eを示す。壁は掘り込みが浅いため判然としないがほぼ垂直に立ち上がる。床面は直床で多少の起伏があり、壁際がやや低くなる。硬化面は認められず、ピット及び壁構などの施設は確認されていない。カマドは北壁の中央に屋外へかけて構築され、主軸は住居跡と若干ずれてN-0°方向を示す。規模は全長85cm、最大幅40cmである。煙道は長く突出するものの燃焼部との境は明瞭ではなく、火床面も認められない。天井部は残存せず、袖あるいは構材についても確認できなかつた。カマド内の堆積土は住居跡内と同様に粘性の強い黒褐色土であり、若干の砂質土も使用していたとみられるが詳細は明ではない。覆土はにぶい黄色粘質土を含んだ黒褐色粘質土の単層である。遺物は収納箱約1/10箱分が出上している。出土状態は住居跡の南側と實際に比較的まとまりをみせ、土師器が主体となり塊・甕がみられる。このほか縁軸陶器塊や石製模造品の有孔円板が出土した。遺物図版番号8・9の有孔円板は流れ込みと判断される。図示した遺物では、1の土師器塊が住居跡の南東角、2の縁軸陶器塊が南西部、4・5の土師器甕が北東角と西部、6の土師器甕が南西角の出上である。時期については、住居跡の形態及び出土遺物から9世紀後葉～10世紀前葉頃としておく。



第9図 1号住居跡



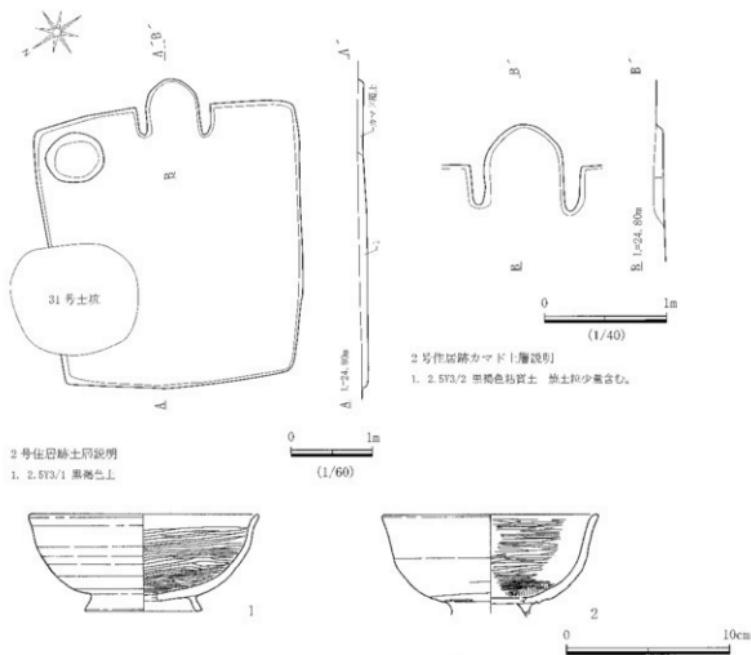
第10図 1号住居跡出土遺物

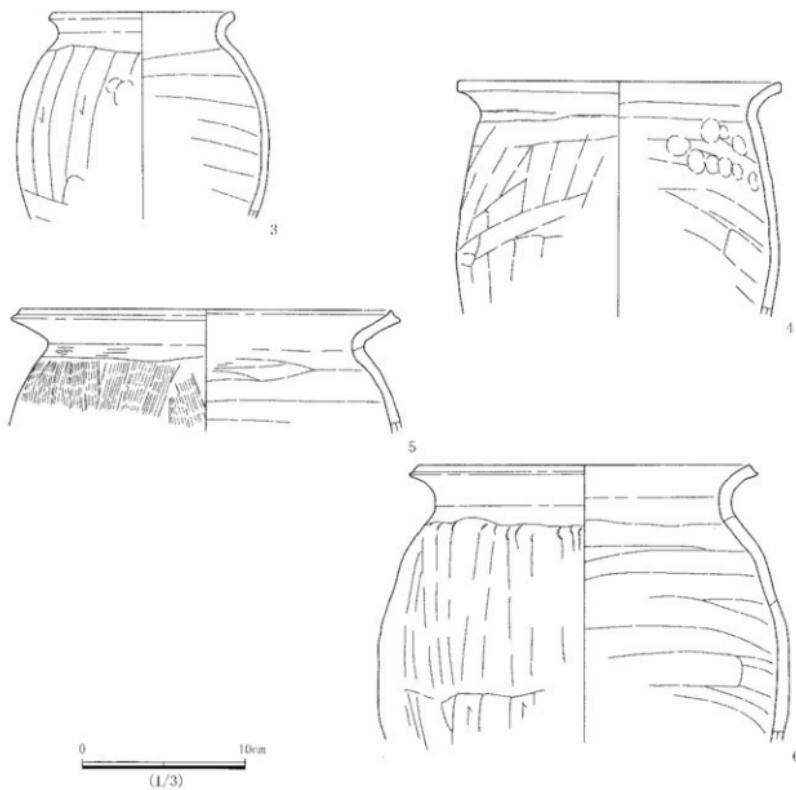
第1表 1号住居跡 出土遺物観察表

遺構	No.	種類	個数	位相	直径	高さ	施色	器物の特徴	整理の特徴	名前	加工	焼成	備考
1号住	1	ココ 上輪胎	163-S01 No.19	[13.3]	[2.8]	-	-	体側はすみを持ち、11 縦溝はわざりに付す。	ハク電離。	内面 10YR8/2 灰黄 外面 10YR8/3	石英チート ・白色地・黒色 多量	・白色・黒色 少量。	小破片。
1号住	2	麻績織物 瓢	163-S01 No.27	-	-	-	-	本体は丸を約つ。	ロタリ型、内外面に 施色施釉。	内面 10YR8/3 灰黄 外面 10YR8/3	石英チート ・白色地・黒色 少量。	小破片。	
1号住	3	上輪胎 瓢	163-S01 No.05-49	[20.0]	[8.7]	-	-	口縁部は外反して黒く、 11縦溝はわざりを退化。	内面、口縁部ハコナフ。 口縁部ハラズ。	内面 10YR7/3 灰黄 外面 10YR7/4	石英チート ・白色地・黒色 少量。	・白色地・黒色 少量。	小破片。
1号住	4	上輪胎 瓢	163-S01 No.19	[19.0]	[7.2]	-	-	口縫は内反して黒く、 11縦溝はわざり。	内面、口縁部ハコナフ。 口縫部ハラズ。	内面 10YR6/6 灰黄 外面 2.3YR5/8	石英チート ・白色地・黒色 少量。	・白色地・黒色 少量。	小破片。
1号住	5	上輪胎 瓢	163-S01 No.05-1番	[21.0]	[23.5]	-	-	口縫は外反して黒く、 口縫部に底溝1条ある。	内面、口縁部ハコナフ。 口縫部1條付底溝の下部 ハラズ。	内面 7.5YR6/6 灰黄 外面 7.5YR5/3	石英チート ・白色地・黒色 少量。	・白色地・黒色 少量。	小破片。
1号住	6	上輪胎 瓢	163-S01 No.33	-	[3.8] (11.6)	-	-	平底の丸底から腹部は 内側に凹む。	内面、口縁部ハラズ。 腹部一部ハラズ。 内面、側面指ナガ、底 部指底凹痕。	内面 7.5YR4/2 灰黄 外面 7.5YR5/3	石英チート ・白色地・黒色 少量。	・白色地・黒色 少量。	小破片。
1号住	7	石製品 磨石	163-S01 No.1	英寸(6.9)	幅[3.6]	厚さ[3.6]	重量 33.95g	在材:泥質岩	-	-	-	-	-
1号住	8	石製品 有孔石板	163-S01 No.01	英寸2.6	幅2.6	厚さ[1.2g]	孔径:0.2	穴材:泥質岩	内面:泥質岩	内面 7.5YR6/2 灰黄 外面 7.5YR5/3	石英チート ・白色地・黒色 少量。	・白色地・黒色 少量。	小破片。
1号住	9	石製品 有孔石板	163-S01 No.02	英寸2.5	幅2.6	厚さ[0.35g]	孔径:0.2	穴材:泥質岩	内面 7.5YR4/2 灰黄 外面 7.5YR5/3	石英チート ・白色地・黒色 少量。	・白色地・黒色 少量。	小破片。	

2号住居跡（第11・12図、写真図版3・8）

調査区の西部に位置し、北東の3号住居跡と12m、南西の1号住居跡と4mの距離をもつ。31号土坑と重複し本跡が古く、住居跡北壁の内寄りが壊されている。黄褐色土層を基盤として構築され、平面形態はやや歪んでいるが正方形に近い。規模は長軸が東西軸で3.45m、南北軸3.15m、確認面からの深さは6~10cmを測り、主軸方向はN-120°-Eを示す。壁は掘り込みが浅いため判然としないが緩やかに立ち上がるのみである。床面は直床でほぼ平坦となる。硬化面は認められず、ピット及び壁溝は確認されていない。カマドは東壁の中央に屋外へかけて構築され、北東隅に貯藏穴と判断される掘り込みを伴う。カマドの主軸は住居跡と同一であり、規模は全長72cm、最大幅65cmである。煙道は突出するものの短く、先端は緩やかに立ち上がる。燃焼部との境は不明瞭で、火床面も認められない。天井部は残存せず、袖基部は地山を削り残した造り袖である。カマド内の堆積土は住居跡内と同様であり構材は認められていない。貯藏穴は平面が梢円形であるものの下端をみるとやや方形気味で、住居跡内と同じく粘性を帯びた黒褐色土の堆積が確認される。規模は上端で73×61cm、深さ16cm、下端で55×44cmを計測する。住居跡内の覆土にはぶい黄色粘質土を含んだ黒褐色粘質土の単層である。遺物は収納箱約1/10箱分が出土している。出土状態は住居跡の南東部に比較的まとまりをみせ、土師器の塊・甕を図示した。遺物図版番号1・2は高台付塊で底径が小さく体部は深い。内面にヘラミガキ及び墨色処理を施し、1はカマド内、2は南西部よりの出土である。3~6は甕で、5が口縁端部がやや上方につまみ上げられる。3・5は南東部、4は南東部と北西部、6は中央部からの出土であった。時期については、出土遺物の形態から10世紀前葉頃の年代が与えられる。





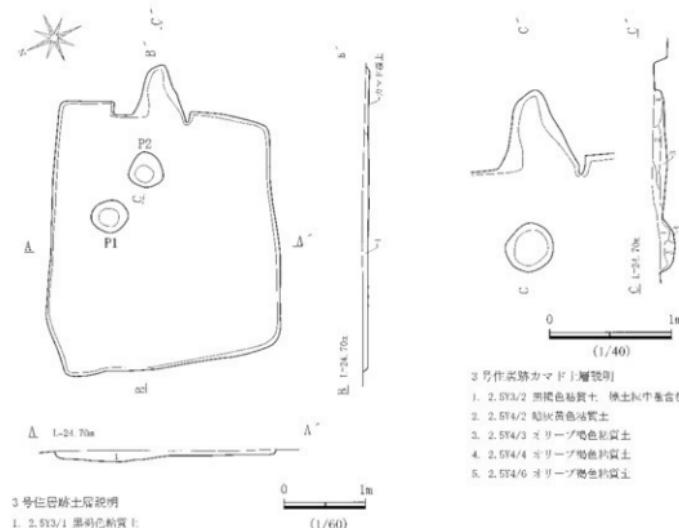
第12図 2号住居跡出土遺物(2)

第2表 2号化居跡 出土遺物観察表

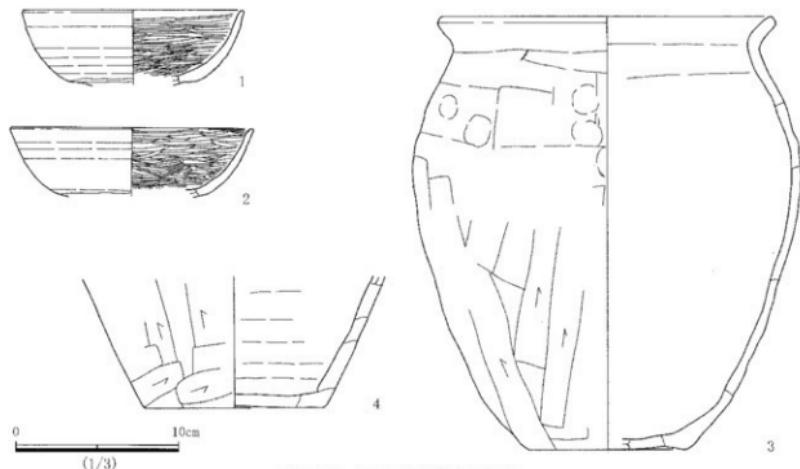
遺物	No.	種類	高さ	口径	口方	器形	断面の特徴	断面の特徴	色調	底上	底足	考	
2号住	1	口付 土器	63-5002 No.33-02	10.1	6.0	7.7	体部は丸みを持ち、口 縁部はむずかしく外反。 底部は外削りで圓く、 底部は厚い。	口付の部、外底、体部 縁部はむずかしく外反。 下部半径もカクツリ。 内面、口縁部へテラリ。 底部は厚い。	内外面7.5V8.0/6	石英チート ・白色粒・黑色 粒少。			
2号住	2	ロクロ 土器	163-5002 No.33-09	03.2	6.1		体部は丸みを持ち、口 縁部はむずかしく外反。 下部半径もカクツリ。	口付の部、外底、体部 下部半径もカクツリ。 内面、口縁部へテラリ。 ガラス。	内面 .0V82/1 外面 6V86/6	石英チート ・白色粒・品色 粒少。			内面品色 系組。
2号住	3	ロクロ 土器	163-5002 No.33-30	01.2	12.7		口縁部は外反して深く 外側、口縁部はカナダ。 内面、口縁部はカナダ。 底部は厚い。	口付の部、外底、 縁部はカクツリ、内面、 内面、口縁部はカナダ、 底部は厚い。	内面 10V86/6	石英チート ・白色粒・角質 粒少。			
2号住	4	土器	163-5002 No.01-36	19.0	14.4	-	口縁部は外反して深く、 外側、口縁部はカナダ。 内面、口縁部はカナダ。	口付の部、外底、 縁部はカクツリ、内面、 内面、口縁部はカナダ、 底部は厚い。	内外面7.5V88/6	石英チート ・白色粒・底色 粒少。			
2号住	5	土器	163-5002 No.18	23.9	7.5	-	口縁部は外反して深く、 外側、口縁部はカナダ。 内面、口縁部はカナダ。 底部は厚い。	口付の部、外底、 縁部はカクツリ、内面、 内面、口縁部はカナダ、 底部は厚い。	内面 10V85/3 に54-真鍮 外面 10V85/2	石英チート ・白色粒・底色 粒少。			
2号住	6	土器	163-5002 No.06-07-08 -09-10-11	21.0	17.0	-	口縁部は外反して深く、 外側、口縁部はカナダ。 内面、口縁部はカナダ。 底部は厚い。	口付の部、外底、 縁部はカクツリ、内面、 内面、口縁部はカナダ、 底部は厚い。	内外面10V88/4 に54-真鍮 内面、口縁部はカナダ、 底部は厚い。	石英チート ・白色粒・底色 粒少。			

3号住居跡（第13・14図、写真図版4・8）

調査区の北部に位置し、南東の4号住居跡と10m、南西の2号住居跡と12mの距離をもつ。黄褐色土層を基盤として構築され、平面形態はやや歪んでいるが主軸方向の長い長方形で、カマドが付設された東壁の北角が平面方形に張り出す。規模は長軸が東西軸で3.08m、南北軸2.83m、確認面からの深さは5~13cmを測る。張り出し部は、東西0.17m、南北0.65mである。主軸方向はN-115°Eを示す。壁は掘り込みが浅いため判然としないがほぼ垂直に立ち上がる。床面は高床で多少の起伏があり、北部分がやや低くなる。硬化面は認められず、壁構は確認されていない。ピットは住居跡中央の北東より2基が検出された。2基共に平面円形で掘り込みは浅い。規模はP1が41×43cm、深さ18cm、P2が45×40cm、深さ20cmである。カマドは東壁の中央に屋外へかけて構築され、主軸は住居跡と同一方向を示す。規模は全長142cm、最大幅125cmである。煙道は長く突出するものの燃焼部との境は明瞭ではなく、火床面も認められない。天井部は残存せず、袖基部は地山を削り残した造り袖である。カマド内の堆積土は粘性を帯びた暗灰黄色土とオリーブ褐色土であった。なお、住居跡内の覆土はにぶい黄色粘質土を含んだ黒褐色粘質土の単層である。遺物は収納箱約1/5箱分が出土している。出土状態は住居跡の中央部に比較的まとまりをみせ、土師器を主体としておりこのうち塊と甕を図示した。遺物図版番号1・2は高台付とみられる塊で、内面にヘラミガキ及び黒色処理を施す。共に中央部床面よりの出土である。3は、カマド内との接合資料で、破片は広く住居跡内に分布し、4は北西部の出土であった。時期については、出土遺物の形態から9世紀後葉～10世紀前葉としておく。



第13図 3号住居跡(I)



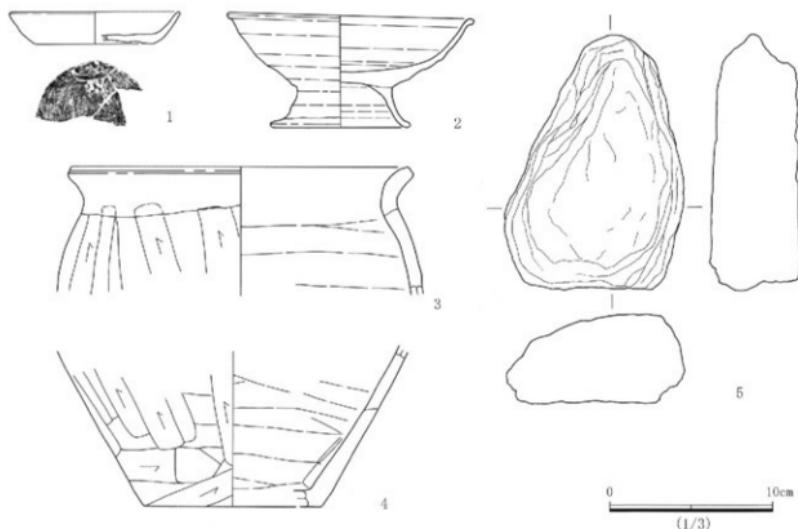
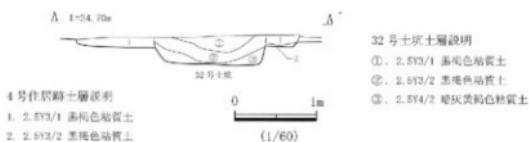
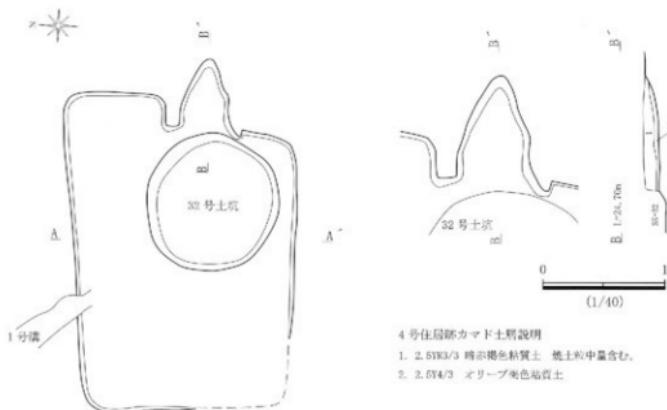
第14図 3号住居跡出土遺物(2)

第3表 3号住居跡 出上遺物観察表

遺構 No.	所在地	形状	片記	下巻	岩高	底深	器形の特徴	表面の性質	色調	壁上	底波	備考
3号住 1) フタ付 壁	163-5803 No.17	(35.0) 6.61					ロクハ底板、外腹、体部 下端手付をへラグズ、 内腹、白神語のカナ、 カナ付。	内面10%白/4 にぶい青釉	也ホ・チャート 良好 ・石英少量			
3号住 2) フタ付 壁	163-5803 No.12-一箇	(34.9) 4.21					ロクハ底板、外腹、体部 下端手付をへラグズ、 内腹、白神語のカナ、 カナ付。	内面 N2-3 黒 外腹 10%白/3 にぶい青釉	石英・チャート 良好 ・白色地・易色 较少量			
3号住 3) 土塗壁 室	163-5803 No.01-02-10 22-67-75+ 77-60-92 85-KA	(20.7) (36.6) 9.8					11枚型は「くろでひび き」、隙縫は上位に 大隙を持つ。	内面2.5%白/6 明め曉	也ホ・チャート 良好 ・石英少量			回上復元
3号住 4) L型窓 壁	163-5803 No.01-18	- 8.0) (11.0)					窓辺は直角的に、 外腹、脚部へラグズ、 底部トゲ、内腹、脚部 へラグズ、底部ナグ。	内面 10%白/4 にぶい青釉 外腹 7.5%白/4 にぶい黒	石英・チャート 良好 ・白色地・易色 较少量			

4号住居跡 (第15図、写真図版5・9)

調査区の北東に位置し、南の5号住居跡と18m、北西の3号住居跡と10mの距離をもつ。32号土坑と重複し本跡が古く、住居跡のカマド前面を大きく壊されている。黄褐色土層を基盤として構築され、平面形態はやや台形状となるが全体的にみれば主軸方向の長い長方形で、カマドが付設された東壁の北角が半面方形に張り出す。規模は長軸が東西軸で3.35m、南北軸2.75m、確認面からの深さは12cmを測る。張り出し部は、東西0.45m、南北1.25mである。主軸方向はN-98°-Eを示す。壁は掘り込みが浅いため判然としないがほぼ垂直に立ち上がり、床面は直床でほぼ平坦である。硬化面は認められず、壁溝及びピットは確認されていない。カマドは東壁の中央に屋外へかけて構築され、主軸は住居跡と同一方向を示す。規模は全長95cm、最大幅63cmである。煙道は長く突出するものの燃焼部との境は明瞭ではなく、火床面も認められない。天井部は残存せず、袖窓部は地山を削り残した造り袖である。カマド内から遺物図版番号5の片麻岩製の支脚が出た。カマド内の堆積土は住居跡内と同様に粘性の強い黒褐色土を主体とする。なお、住居跡内の覆土にはぶい黄色粘質土を含んだ黒褐色粘質土である。遺物は収納箱約1/10倍分が出土している。出土状態はカマド内に集中しており、全体としては少量であるが、土師器の壺・瓶・甕、右製支脚を図示した。遺物図版番号1の壺は皿状、2は足高台の塊で、共にカマド内の出土である。3・4は甕で、3は11縁端部が曲をなす。時期については、皿状の壺及び足高台など出土遺物の形態から10世紀後葉の年代が与えられる。



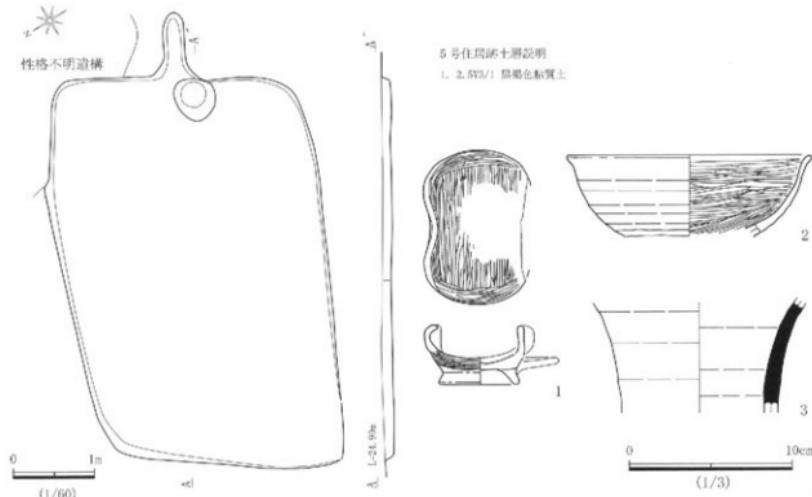
第15図 4号住居跡・出土遺物

第4表 4号住居跡 出土遺物観察表

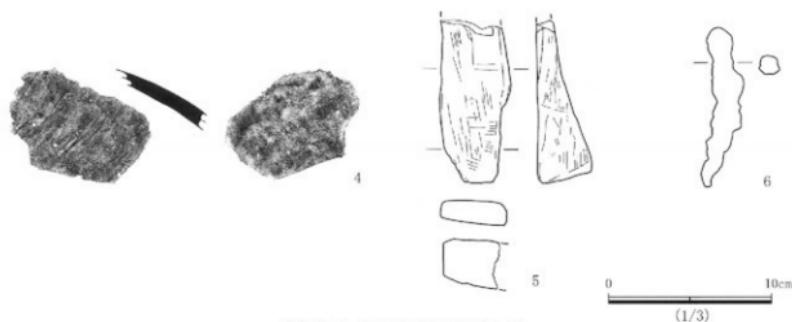
造構 No.	種類	断面	柱記	口径	高さ	底径	基面の特徴	形态の特徴	色調	触感	深成	備考
4号住 1	ロクロ 土師器	小型杯 KA-一筋	163-S104	(10.0)	1.9	7.20	内面は直線的に傾く。 底切妻無斜傾。	クロコ形成、底深、凹輪 底切妻無斜傾。	内面 SYBS/B 横 外面 7.5SYB/E 根 石少量。	石英・チャート ・白色灰・角閃 石少量。	良好	内外面に 偏着する。
4号住 2	ロクロ 土師器	壺	163-S104 KA-SK32 一筋	15.1	7.1	8.6	口縁部は三連状、作溝 は丸みを持つ。高台は 高く、底部は外反する。	クロコ成、彫形。	内面 7.5SYB/E にぶい灰 外面 7.5SYB/E 根 石少量。	石英・チャート ・白色灰・黒色 石少量。	良好	
4号住 3	土師器	壺	163-S104 一筋	(1.0)	[7.9]	-	口縁部は外反して開く。 外縁、口縁部にカナデ、 脚部へカズブ。P内面 は彫形カナデ、脚部 ヘナダ。	内面 SYBS/B 根 石少量。	石英・チャート ・白色灰少量。	良好	上同一 自体。	
4号住 4	土師器	壺	163-S104 一筋・SK32 一筋	-	[10.0]	[10.6]	脚部は直線的に傾く。	内面 SYBS/B 根 石少量。	石英・チャート ・白色灰少量。	良好	上同一 自体。	
4号住 5	漆 支牌	163-S104 カマド内	長319.5 幅16.9 厚さ3 重さ179.3g	石材・瓦砾岩	長16.9cm							

5号住居跡 (第16・17図、写真図版6・9)

調査区の南に位置し、北西の1号住居跡と16m、北の4号住居跡と18mの距離をもつ。性格不明造構と重複し本跡が新しい。黄褐色土層を基盤として構築され、平面形態はやや歪んでいるが主軸方向の長い長方形である。規模は長軸が東西軸で4.83m、南北軸3.35m、確認面からの深さは12cmを測る。主軸方向はN-116°-Eを示す。壁は掘り込みが浅いため判然としないがほぼ直立に立ち上がり、床面は直床でほぼ平坦である。硬化面は認められず、壁漢及びピットは確認されていない。カマドは東壁の中央に屋外へかけて構築され、主軸は住居跡と同一方向を示す。規模は全長95cm、最大幅48cmである。煙道は長く突出するものの燃焼部との境は明瞭ではなく、火床面も認められない。天井部と袖は残存せず、前面の床下から平面円形の浅い掘り込みが認められている。規模は53×50cm、深さ26cmである。カマド内の堆積土は住居跡内と同様であり、構材は確認されない。なお、住居跡内の土壌はにぶい黄色粘質土を含んだ黒褐色粘質土の単層である。遺物は収納箱約1/10箱分が出土している。出土状態はカマド周辺にまとまりをみせる。図示した遺物は、土師器の壺・耳皿、須恵器の瓶類・壺、石製品の砥石、用途不明の鉄製品である。遺物図版番号1・3は住居跡東壁際、2は南壁際、4は東壁際、5は北壁際、6は中央北よりの出土であった。時期については、出土遺物の形態から9世紀後葉の年代が与えられる。



第16図 5号住居跡・出土遺物 (1)



第17図 5号住居跡出土遺物(2)

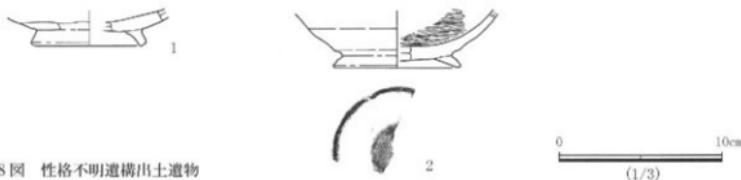
第5表 5号住居跡 出土遺物観察表

遺構	No.	種類	直径	注記	口径	深さ	底径	断面の形態	断面の寸法	色調	胎上	施成	備考
5号住	1	土師器 平底	163-S105 No.95	—	9.5	3.7	4.9	長軸方向に縦溝あり、外周、口縁部～体部は横矢方向に削ぎ、加厚部、底台部～底部でガラスを押し込んで立ち上がり、今、高台割ナメ。	内面 ND/灰 外周 10V2/1	石英・チャート 白色粒、墨色 粒少量。	良好	内外部全體を同色 处理。	
5号住	2	ロクロ 土師器	163-S105 No.91	(15.0)	[4.9]	—	—	全体部は丸みを持ち、口縁部は広く外反。	内面 SV2/1 黒 外周 7.5VR1/3 黒	黄土・薄砂粒 少量	良好	内面墨色 處理。	
5号住	3	瓦焼器 扇	163-S105 No.94	—	[6.7]	—	—	断面は外反して丸く、口縁部は整形。	内面 SV7/2 灰白 外周 SV7/1	白色粒・墨色 粒微量。	避光	内面と外 面均一 自然色。	
5号住	4	瓦焼器 扇	163-S105 X	—	—	—	—	やや丸みを持つ扇形、外周、平行タテノ、内面、無文の陶具。	内面 NA/灰 外周 2.5VR1/1 赤	石英・チャート 少量、白色 粒微量。	避光	外面上灰 色あり。	
5号住	5	石製品 破石	163-S105 No.93	—	長さ[0.0]	幅4.4	厚3.4	重量38.5g	石材:泥状岩	4面鏡面、上端部欠損。			
5号住	6	石製品 平形	163-S105 No.92	—	長29.7	幅2.0	厚さ1.3	重量33.8g	—	—			

第2節 性格不明遺構

性格不明遺構 (第18・19図、写真図版7・10)

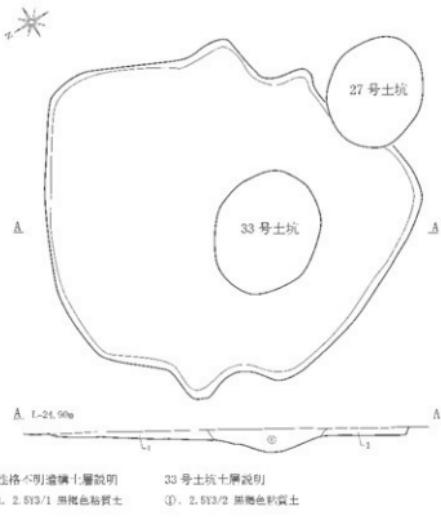
調査区の南部に位置し、北西の1号住居跡と20m、北の4号住居跡と14mの距離をもつ。1号住居跡・27・33号土坑と重複し本跡が古く、遺構の南部分と中央部を壊されている。黄褐色土層を基盤として構築され、平面形態は凹凸が認められるが全体としては方形を意識していたとみられる。住居の構築を意図したものか。規模は長軸が南北軸で4.44m、東西軸3.64m、確認面からの深さは4~11cmを測る。長軸方向はN~30°~Eを示す。壁は掘り込みが浅いため判然としないがほぼ垂直に立ち上がり、底面は直床で、ほぼ平坦である。硬面は認められず、施設は確認されていない。覆土にはぶい黄色粘質土を含んだ黒褐色粘質土の単層である。遺物は収納箱約1/10箱分が出土している。出土遺物は全体に少なく、土師器の塊を図示した。時期については、出土遺物の形態から9世紀後葉頃の年代が与えられる。



第18図 性格不明遺構出土遺物

第6表 性格不明遺構 出土遺物観察表

遺構	No.	種類	特徴	柱配	口幅	器體	底径	高さの特徴	輪郭の特徴	色調	断面	施成	内面
性格不明遺構	1	柱式 上部部	掘	163 SN01	-	[2.3]	(7.1)	高さは外側に傾く。	ロクノ型形、外面、内部 下端子持ちハーフズリ、 周縁部は内側削落、高 台取付。	内面 7.5m/6 下端子持ちハーフズリ、 周縁部は内側削落、高 台取付。	石灰・チャート	丸窓	-
性格不明遺構	2	柱式 上部部	掘	163 SN01	-	[3.5]	(7.0)	内側は丸みを含つ。高 台は外側に傾く。	ロクノ型形、外面、内部 下端子持ちハーフズリ、 周縁部は内側削落、高 台取付後、台面詰 め。内面、底面とも。	内面 10.0m/1 外端 10.7m/1	瓦灰・チャート ・白色灰・黑色 に混在	丸窓	内面黑色 處理。



第19図 性格不明遺構

第3節 土坑

1号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の北部に位置する。平面形態は橢円形で、規模は東西軸1.20m、南北軸1.42m、深さ0.44m以上を測る。長軸方向はN 40° - Eを示す。湧水が激しく安全上完掘はできなかつたが、上部がやや開き井戸跡とみられる。覆土は黒褐色粘質土と暗灰黄褐色粘質土である。遺物は掲載しなかつたが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

2号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の北部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸0.81m、南北軸0.78m、深さ0.42m以上を測る。長軸方向はN -55° - Wを示す。湧水が激しく安全上完掘はできなかつたが、上部がやや開き井戸跡とみられる。覆土は黒褐色粘質土とオリーブ褐色粘質土である。遺物は掲載しなかつたが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

3号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の東部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸0.90m、南北軸1.00m、深さ0.14mを測る。長軸方向はN -31° - Wを示す。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は暗灰黄褐色粘質土とオリーブ

褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

4号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の北部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸1.04m、南北軸1.08m、深さ0.24mを測る。長軸方向はN-41°-Wを示す。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土とオリーブ褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

5号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の北部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸1.18m、南北軸1.24m、深さ0.20mを測る。長軸方向はN-40°-Wを示す。底面は平坦であるものの壁際がやや高くなり垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

6号土坑（第20・22図、写真図版7・9）

調査区の北部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸0.98m、南北軸1.12m、深さ0.52mを測る。長軸方向はN-34°-Eを示す。底面は平坦で、壁は下端に丸味をもって垂直に立ち上がり上端がやや開く。覆土は黒褐色粘質土である。遺物は須恵器の壺が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から奈良・平安時代の所産とみられる。

7号土坑（第20・22図、写真図版7・9）

調査区の南部に位置する。平面形態は長楕円形で、規模は東西軸2.15m、南北軸0.76m、深さ0.12mを測る。長軸方向はN-85°-Wを示す。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は土師器の壺が出土している。時期は出土遺物から9世紀後葉～10世紀前葉頃とみられる。

8号土坑（第20・22図、写真図版7・9）

調査区の中央部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸0.60m、南北軸0.56m、深さ0.18mを測る。長軸方向はN-82°-Eを示す。底面は平坦で、壁は下端に丸味をもって緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土とオリーブ褐色粘質土である。遺物は須恵器の壺が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から奈良・平安時代の所産とみられる。

9号土坑（第20図、写真図版7・9）

調査区の中央部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸0.92m、南北軸0.92m、深さ0.18mを測る。長軸方向はN-0°を示す。底面は平坦で、壁は下端に丸味をもって緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土とオリーブ褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

10号土坑（第20・22図、写真図版7・9）

調査区の中央部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸0.88m、南北軸1.00m、深さ0.25mを

測る。長軸方向はN ~40° Eを示す。底面は平坦で、壁は下端に丸味をもって垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は土師器の塊が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から9世紀後葉～10世紀前葉の所産とみられる。

11号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の中央部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸0.97m、南北軸1.02m、深さ0.56mを測る。長軸方向はN ~32° - Wを示す。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は掲載しなかったが、上師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

12号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の中央部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸0.80m、南北軸0.84m、深さ0.16mを測る。長軸方向はN ~38° - Eを示す。底面は平坦で、壁は下端に丸味をもって緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は掲載しなかったが、上師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

13号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の北部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸1.20m、南北軸1.30m、深さ0.40mを測る。長軸方向はN ~36° - Wを示す。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は掲載しなかったが、上師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

14号土坑（第20・22図、写真図版7・9）

調査区の南部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸0.83m、南北軸0.98m、最深部の深さ0.17mを測る。長軸方向はN ~40° - Wを示す。底面は平坦であるものの南側がやや陥る。壁は下端に丸味をもって緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は平瓦片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から奈良・平安時代の所産とみられる。

15号土坑（第20・22図、写真図版7・9）

調査区の中央部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸1.50m、南北軸1.60m、深さ0.30mを測る。長軸方向はN ~41° Eを示す。底面は平坦で、壁は下端に丸味をもって垂直に立ち上がり上端がやや開く。覆土は黒褐色粘質土である。遺物は土師器の塊が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から9世紀後葉頃の所産とみられる。

16号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の中央部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸1.24m、南北軸1.24m、最深部の深さ0.24mを測る。長軸方向はN ~0°を示す。底面は平坦であるものの南へ向けて僅かに傾斜する。壁は下端に丸味をもって緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は掲載しなかったが、上師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

17号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の南部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸1.10m、南北軸1.05m、深さ0.45mを測る。長軸方向はN-50°-Eを示す。底面は凹凸があり、壁は下端が角張り垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土と灰黄褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

18号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の南部に位置する。平面形態は楕円形で、規模は東西軸0.98m、南北軸1.36m、最深部の深さ0.24mを測る。長軸方向はN-30°-Eを示す。底面は中央部が最も深く、壁は丸味をもって緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土とオリーブ褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と山上遺物から平安時代の所産とみられる。

19号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の南部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸0.62m、南北軸0.62m、深さ0.11mを測る。長軸方向はN-0°を示す。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土とオリーブ褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は出土遺物から平安時代の所産とみられる。

20号土坑（第20・22図、写真図版7・9）

調査区の南部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸1.36m、南北軸1.34m、最深部の深さ0.60mを測る。長軸方向はN-80°-Eを示す。底面は中央部が最も深く、壁は丸味をもって緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土と暗灰黄褐色粘質土である。遺物は土師器の塊が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から10世紀代の所産とみられる。

21号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の南部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸0.54m、南北軸0.56m、深さ0.11mを測る。長軸方向はN-40°-Wを示す。底面は中央がやや高くなり、壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

22号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の南部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸0.60m、南北軸0.50m、深さ0.10mを測る。長軸方向はN-70°-Wを示す。底面は多少の凹凸があり、壁は丸味をもって緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

23号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の南部に位置する。平面形態は楕円形で、規模は東西軸1.26m、南北軸1.54m、最深部の深さ0.22mを測る。長軸方向はN-40°-Eを示す。底面は中央部が最も深く、壁は丸味をもって緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土と暗灰黄褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と山上遺物から平安時代の所産とみられる。

24号土坑（第21・22図、写真図版7・9）

調査区の中央部に位置する。平面形態はいわゆる瓢箪形で2基の上坑が重複した様相である。規模は東西軸1.21m、南北軸2.02m、深さ0.40mを測る。長軸方向はN 42° - Wを示す。底面は東側が高くなり、壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土とオリーブ褐色粘質土である。遺物は土師器の塊が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

25号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の南部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸1.32m、南北軸1.36m、深さ0.35mを測る。長軸方向はN -40° - Wを示す。底面は平坦で、北東部の壁際に小ピットを伴う。壁は垂直に立ち上がり上部で開く。覆土は黒褐色粘質土と暗灰黃褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

26号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の南部に位置する。平面形態は円形を基調とし、北側に梢円形の浅い掘り込みを伴う。規模は東西軸1.80m、南北軸1.90m、深さ0.50mを測り、長軸方向はN 40° Eを示す。北側の掘り込みの長軸は2.40m、短軸1.08m、深さ0.10mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土とオリーブ褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

27号土坑（第21・22図、写真図版7・9）

調査区の南部に位置する。性格不明遺構と重複し本跡が新しい構築である。平面形態は円形で、規模は東西軸1.36m、南北軸1.42m、深さ0.24mを測る。長軸方向はN -30° - Wを示す。底面は多少の凹凸があり、壁は丸味をもって緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は土師器の塊と塊が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から10世紀後葉の所産とみられる。

28号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の南部に位置する。平面形態は円形で、規模は東西軸1.08m、南北軸1.12m、深さ0.30mを測る。長軸方向はN -28° - Wを示す。底面は平坦で、壁は丸味をもって緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

29号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の南部に位置する。平面形態は梢円形で、規模は東西軸1.68m、南北軸1.06m、深さ0.16mを測る。長軸方向はN -73° - Wを示す。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

30号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の南部に位置する。平面形態は円形と推測され1/2ほどが調査区外となる。規模は東西軸1.19m、南北軸0.80m以上、調査区際の土層断面にみる深さは0.30mを測る。長軸方向は不明である。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土と灰黃褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

31号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の西部に位置する。1号住居跡と重複し本跡が新しい構築である。平面形態は梢円形で、規模は東西軸1.35m、南北軸1.54m、深さ0.67mを測り、長軸方向はN-34°-Eを示す。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土とオリーブ褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

32号土坑（第15・22図、写真図版7）

調査区の東部に位置する。4号住居跡と重複し本跡が新しい構築である。平面形態は円形で、規模は東西軸1.68m、南北軸1.65m、深さ0.36mを測り、長軸方向はN-34°-Eを示す。底面は平坦で、壁は下端に丸味をもって垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色粘質土と暗灰黃褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

33号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の南部に位置する。性格不明造構と重複し本跡が新しい構築である。平面形態は梢円形で、規模は東西軸1.26m、南北軸1.54m、深さ0.30mを測り、長軸方向はN-34°-Wを示す。底面は平坦で、壁は南側が垂直に立ち上がるほかは緩やかである。覆土は黒褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。

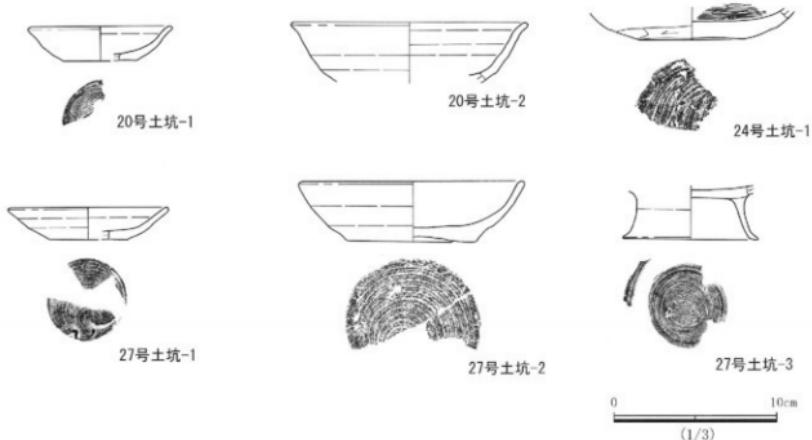
34号土坑（第22図、写真図版7）

調査区の北部に位置する。平面形態は梢円形で、規模は東西軸1.46m、南北軸1.98m、深さ0.58mを測り、長軸方向はN-30°-Eを示す。底面は平坦で、壁は南側が緩やかに立ち上がるほかは垂直である。覆土はロームブロックを多く含む黒褐色粘質土である。遺物は掲載しなかったが、土師器の細片が出土している。時期は覆土の状況と出土遺物から平安時代の所産とみられる。



第20図 6～8・10・14・15号土坑出土遺物

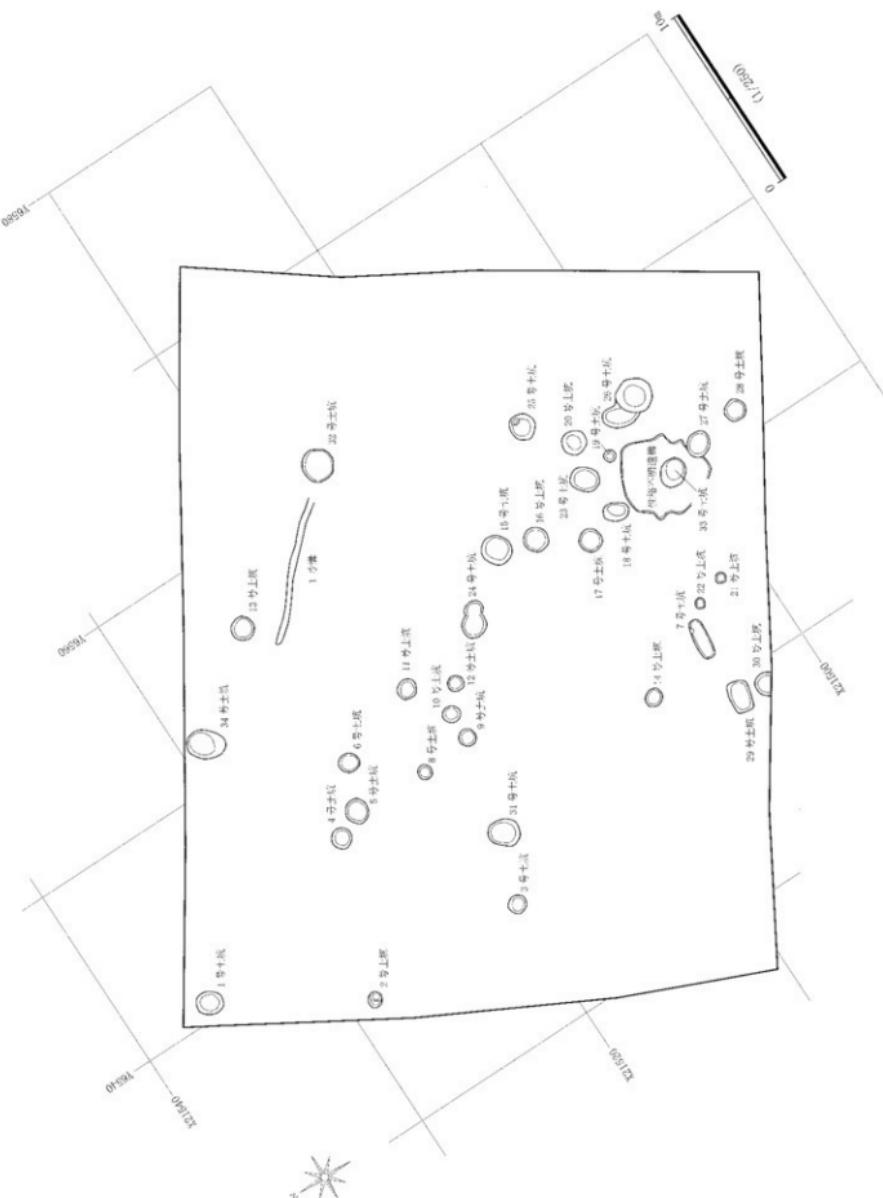
(1/3)



第21図 20・24・27号土坑出土遺物

第7表 土坑 出土遺物観察表

遺構	No.	種類	断縫	目記	口径	都度	底径	断面の特徴	整列の特徴	色調	筋	地成	備考
6号土坑	1	灰唐器	丸	163-SK09				断面丸形。	外周平打タキ、内曲、ナゾ。	内面 107BR/1 外壁 N6/ 灰 内面 5YR8/1 外壁 2.5YR8/8 埋	石英+チャート ・白色粒・黑色 微少量。	済元	
7号土坑	1	ロクロ 土器	丸	163-SK07	—	[3.0]	(6.5)	体部は丸みを持つ。肩台は外側に傾く。	リカラ成形。外面、体部下端手摺らハツヅリ、内曲。 内面、体部へ底深くがる。	内面 N6/ 灰 外壁 5YR8/1 内面 N15/ 黒 外壁 7.5YR7/4 に、5YR7/4	石英+チャート ・白色粒・黑色 微少量。	済元	内面深色 地成。
8号土坑	1	灰唐器	丸	163-SK08	—	—	—	断面丸形。	外周平打タキ後ナゾ、内面、摩擦。	内面 N6/ 灰 外壁 5YR8/1 内面 N15/ 黑 外壁 7.5YR7/4 に、5YR7/4	石英+白色粒 ・黑色粒微量。	済元	
10号土坑	1	ロクロ 土器	丸	163-SK10	—	(1.6)		肩台大丸。	ロクロ成形。外山、体部下端手摺らハツヅリ、内曲。体部へ底深くがる。	内面 N6/ 灰 外壁 5YR8/1 内面 N15/ 黑 外壁 7.5YR7/4 に、5YR7/4	石英+白色粒 ・黑色粒微量。	済元	内面黑色 地成。
14号土坑	1	瓦	半丸	163-SK14	—	—	—	断面、有孔、直面、ハツヅリ後ナゾ。	内面 2.5YR7/2 壁灰黄 内面 5YR7/6 灰	石英+チャート ・白色粒・黑色 微少量。	済元	普通 厚さ1.6cm	
15号土坑	1	ロクロ 土器	丸	163-SK15	(2.6)	5.7	7.0	体部は丸みを持つ。肩台は外側に傾く。	ロクロ成形。外面、体部下端手摺らハツヅリ、内面、口縁部へ底深くがる。	内面 5YR6/6 明治場 外壁 7.5YR5/4 に、5YR7/4	石英+チャート ・白色粒・黑色 微少量。	済元	内面不定 全般黑色 地成。
20号土坑	1	ロクロ 土器	丸	163-SK20	(0.8)	2.1	(1.6)	体部は丸みを持つ。11 縫合は外反する。	ロクロ成形。外面、底深くがる。	内面 2.5YR5/6 明治場 外壁 5YR6/6 横	石英+チャート ・白色粒・黑色 微少量。	済元	
20号土坑	2	ロクロ 土器	丸	163-SK20	(1.0)	—	—	11縫合はやや外反する。	ロクロ成形。内面、口縁部へ底深くがる。	内面 5YR6/6 横 外壁 7.5YR7/6 横	石英+チャート ・白色粒・黑色 微少量。	済元	
21号土坑	1	ロクロ 土器	丸	163-SK21	—	[1.8]	(6.2)	体部は丸みを持つ。豆上る。	ロクロ成形。外面、底深くがる。	内面 7.5YR1/2 灰路 外壁 7.5YR6/6 横	石英+チャート ・白色粒・黑色 微少量。	済元	
27号土坑	1	ロクロ 土器	小型丸	163-SK27	9.9	2.0	4.9	口縁部はわずかに外反する。	ロクロ成形。外面、底深くがる。	内外面 7.5YR7/6 横	石英+チャート ・白色粒・黑色 微少量。	済元	
27号土坑	2	ロクロ 土器	丸	163-SK27	(3.9)	3.7	(7.9)	体部は丸みを持つ。	ロクロ成形。外面、底深くがる。	内面 107BR/2 灰路 外壁 107BR/6 手	石英+チャート ・白色粒・黑色 微少量。	済元	
27号土坑	3	ロクロ 土器	丸	163-SK27	—	[3.3]	(8.3)	高台は直く。縫合は外 反する。	ロクロ成形。外面、底深くがる。	内面 7.5YR7/4 に、5YR7/4 外壁 7.5YR4/2 灰	石英+チャート ・白色粒・黑色 微少量。	済元	



第22図 性格不明遺構、1~34号上坑、1号溝

第4節 溝状遺構

1号溝（第22図、写真図版7）

調査区の北部に位置する。4号住居跡と重複し本溝が新しく、住居跡の壁の一端を成している。規模は長さ7.96m、幅0.30～0.38m、深さ0.13mを測り、主軸方向はN-45°～Wを示す。底面は凹凸があり、断面形状は概ね逆台形を呈する。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は出土していない。時期は不明である。

第5節 遺構外出土遺物

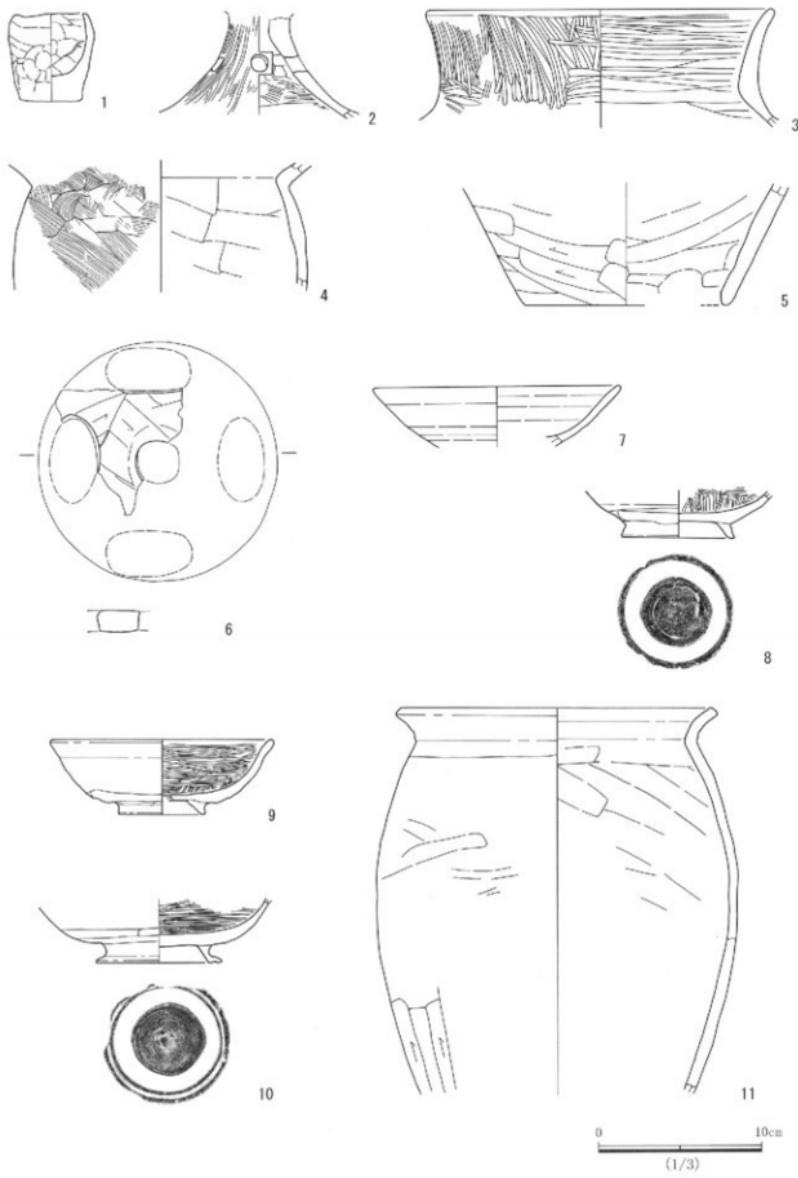
遺物は収納箱約1/4箱分が出土している。その中から11点を掲載した。

1は手挽土器で古墳時代前期、2は土師器の器台で4世紀後葉～5世紀前葉、3は土師器甕の口縁部で4世紀後葉～5世紀前葉、4は土師器甕の口縁部～胴部で4世紀後葉～5世紀前葉の所産とみられ、1～4は古墳時代前期の遺物と考えられる。5は土師器瓶の胴部、6は土師器甕の底部片で、5・6は古墳時代後期～奈良・平安時代の所産であると思われる。7は土師器ロクロ成形の坏で9世紀代の所産と考えられる。8は上師器ロクロ成形の高台付塊で9世紀後半、9は土師器ロクロ成形の高台付塊で9世紀後葉～10世紀前葉、10は土師器ロクロ成形の高台付塊で10世紀後半、11は底部を欠損している上師器の甕で9世紀後葉～10世紀前葉の所産とみられ、7～11は平安時代の遺物と考えられる。

（齋藤 洋・小川将之）

第8表 遺構外 出土遺物観察表

発見 遺構外	No.	種類	基盤	深度	11号	基盤	底地	断面の特徴	断面の測定	色調	表面	底地	備考	
	1	手挽土器	手挽土器	163-名	直	—	3.5	0.8	断面はV字型とする。	赤茶、し縫跡・吹き跡 ・直角・底地・底付り ・内凹、口縁部へ至 る所まで。	内凹 10YR8/4 にじ・黄褐色 外縁 2.5Y7/3	石英・チャート ・白色・黑色 ・少量。	良好	
遺構外	2	土師器	甕	163-低	—	(6.1)	—	断面は45°、内側は大 きく斜く。	内凹、脚部・口縁部 ・内側・脚部・口縁部 ・底付り・脚付ナギ。	内凹 10YR8/4 底付り 外縁 2.5Y7/3	石英・チャート ・白色・黑色 ・少量。	良好		
遺構外	3	土師器	甕	163-低	21.4	—	7.2	—	口縁部はやや外反して 傾く。	内凹、口縁部・底付り ・内側・口縁部	内凹 10YR8/4 口縁部	石英・チャート ・白色・黑色 ・少量。	良好	
遺構外	4	土師器	甕	163表上 一部	—	7.81	—	口縁部は内反して傾く。 口の下に凹印。	内凹、口縁部・脚部・ 内側・脚部・口縁部	内凹 10YR8/1 底付り 外縁 10YR8/2	石英・チャート ・白色・黑色 ・少量。	良好		
遺構外	5	土師器	甕	163-低	—	(7.1)	12.0	底付部・腰部が多孔質の 内側・脚部は陶質的に 異なる。	内凹、脚部・ヘラクス。 内側・脚部・ヘラクス。	内凹 7.5Y3/2 底付 外縁 7.5Y3/4	黄土・白灰・灰 石・赤褐色	良好		
遺構外	6	土師器	甕	163-低	—	—	—	底付部、内側部に凹痕。 内側・脚部上に横に凹 45度と規定される。 ナギ。	内凹、底付・ヘラクス。 内側・脚部・ヘラクス。 内側・脚部・ナギ。内・底 付・ナギ。	内凹 10YR8/3 底付 内凹 7.5Y3/4	石英・チャート ・白色・黑色 ・少量。	良好		
遺構外	7	ロクロ 土師器	甕	163-低	(16.2)	13.6	—	口縁部はわずかにえらを 持つ。	ロクロ成形。	芦かぬ 7.5Y3/5 底付	石英・白色 ・白色・黑色 ・少量。	良好		
遺構外	8	ロクロ 土師器	甕	163-低	—	(2.8)	6.9	内側は外方に傾く。	ロクロ成形、外側、底付 下部手付シルバクズ。	内凹 10YR8/1 底付 内凹 10YR8/2	石英・白色 ・白色・黑色 ・少量。	良好	内面不規 今化黑色 地斑。	
遺構外 武器	9	ロクロ 土師器	甕	川原下木 51内	(13.8)	6.4	—	外側は丸みを帯び、口 不整な凹凸がありながら す。断面三尖形の表 面。	ロクロ成形、外側、底付 下部手付シルバクズ。 内凹、底付シルバクズ 手付。	内凹 5Y3/1 底付 外縁 10YR8/2	石英・チャート ・白色・黑色 ・少量。	良好	内面不規 今化黑色 地斑。	
遺構外	10	ロクロ 土師器	甕	163-低	—	(3.4)	1.6	体部は丸みを帯び、口 部は斜めに折れ る。	ロクロ成形、外側、底付 下部手付シルバクズ。 内凹、底付シルバクズ 手付。	内凹 10YR8/1 底付 内凹 7.5Y3/6	石英・チャート ・白色・黑色 ・少量。	良好	内面不規 今化黑色 地斑。	
遺構外	11	土師器	甕	163-名	(19.8)	123.5	—	口縁部は内反して傾く。 内側・脚部ロクロア ・口縁部直付。	内凹、脚部ロクロア ・口縁部直付。	内凹 7.5Y3/6	石英・チャート ・白色・黑色 ・少量。	良好	内面に擦 れ跡。	



第23図 遺構外出土遺物

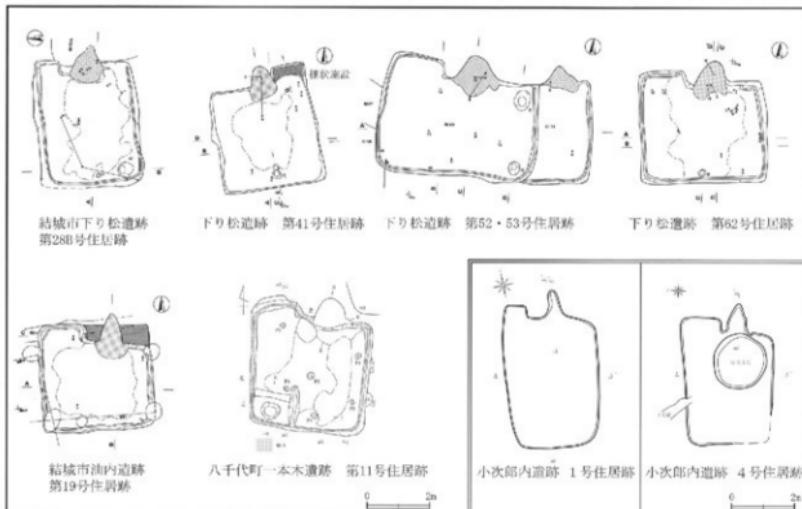
第5章 総 括

小次郎内遺跡は、鬼怒川の旧河道（現飯沼川）を眼下に臨む台地上に立地し、平成13年刊行の『茨城県遺跡地図』では奈良・平安時代、中・近世の集落跡とされ、その範囲は約23,000m²に及んでいる。調査は、周知されている遺跡の南部に実施されたもので、面積が1,320m²とまとまったことが幸いして、平安時代に営まれた集落の一端が明らかとなった。

検出された遺構は、堅穴住居跡5軒、土坑34基、性格不明遺構1基、時期・用途不明の溝状遺構1条である。遺物は、平安時代の土器類を中心に、少量ではあるが古墳時代中・後期の資料を得ている。古墳時代の遺構は検出されておらず、積極的に集落の展開を予測するまでは至っていないが、周辺部における埋蔵は十分にうかがわれる。

集落が営まれた時期については、出土遺物の型式学的編年を援用すると、須恵器の比率が低く土師器が大多数を占める様相や、境における高台の足高化、耳皿や皿状の坏が確認されること。甕の口縁部は短く「く」の字状に外反し、端部が面をなすなどの土器様式から、平安時代のなかでも9世紀後葉～11世紀前葉の年代が与えられる。各住居跡個別の時期は、5号住居跡が9世紀後葉、1・3号住居跡が9世紀後葉～10世紀前葉、2号住居跡が10世紀前葉、4号住居跡が10世紀後葉である。

本調査における成果として特筆される点は住居跡の構造にある。この時期の常陸国では、堅穴の平面が正方形あるいはカマドに対して主軸方向が短い横長傾向にあるものの、本遺跡では縱長化がうかがわれ、カマドの左側が平面方形に張り出して掘り込まれる特徴をもつ。調査された5軒の堅穴住居跡のうち、平面正方形の2号住居跡を除くといずれも縱長で、さらに、2・5号住居跡を除く3軒はカマドの左側にはこの張り出しを伴っていた。2号住居跡は張り出しを伴っていないが、カマドの左側には貯蔵穴が付設されている。住居跡構造の変遷を追うと、張り出しを伴わない形態から張り出しの付設へと変化するようである。



第24図 本遺跡と周辺遺跡より検出の住居跡

八千代町内にて調査報告がなされている「一本木遺跡」より検出の第11号住居跡と第17号住居跡でも、カマドを正面に見た左側に平面方形に張り出す掘り込みが確認されている。これら2軒の遺構は報告書中の分類ではIV-aに含まれているもので、帰属年代は9世紀代平安に属するものである。いずれの遺構も平面形状はやや歪ながら正方形を呈し、規模は第11号住居跡が東西軸3.58m、南北軸3.50mで面積が12.2m²、第17号住居跡が東西軸3.50m、南北軸3.60mで面積が12.6m²とほぼ同一の形状と規模を呈している。今回の報告では遺存状況の良好な第11号住居跡を比較資料として第24図に示した。また、結城市の下り松・油内遺跡では、奈良・平安時代に属する163軒の住居跡のうち、5軒においてカマドの横に張り出しが確認できる。住居跡の平面形態は正方形を基調とし、縦長の長方形は1軒となるが顕著ではない。横長の長方形は1軒である。張り出しの付設位置についても、カマドの対面左側に偏在しており本遺跡と同じ傾向にある。時期については、9世紀後葉2軒、末1軒、10世紀前半2軒であり、縦長の住居跡は10世紀前半に比定される。さらに、下り松・油内遺跡での特徴的な住居跡構造として、カマドの脇に検出された棚状施設がある。棚状施設は住居跡窓穴の外側に隣接して營まれた平面方形の深い掘り込みで、張り出しのように住居跡の床面には達しておらず、全てカマド右側に位置している。この形態の住居跡は4軒が検出され、帰属年代は9世紀中葉2軒と後葉1軒、9世紀末～10世紀初頭1軒であった。第24図に示したが、油内遺跡では、9世紀後葉に位置付けられる第19号住居跡より張り出しと棚状施設が共に検出されている。本遺跡で棚状施設は認められていないが、油内遺跡第19号住居跡のように両者が共に検出され、位置に規則性がうかがわれるることは、有機的な関係を物語るものであろう。時期的には棚状施設が先行して構築され、張り出しを作るように変化した可能性がある。また、棚状施設は掘り込みが浅いため、上部が削平等により失われ検出されなかつたとの考え方もある。小次郎内遺跡の場合は各住居の掘り込み深度が浅くその可能性は高いといえよう。また、縦長の平面形態は、住居の建物構造に起因すると理解され、僅かな事例での結論付けはできないが、平面正方形が一般的であるなかで縦長傾向と張り出しが認められることは、同一の機能あるいは習俗を共有する集団の存在を示唆している。

遺跡が主に営まれた9世紀後半～10世紀は、全国的に律令制度が弛緩する時期にあって、各地に私営田領主が現れ地方の自立性が強まっていく。本遺跡周辺の川村・宮東遺跡は奈良・平安時代の集落跡を中心になるとみられ、さらに飯沼川の下流には「領主製鉄」と目されている9世紀第2・第3四半期内に操業した、尾崎前山製鉄遺跡が位置している。今回の調査は遺跡全域に実施されていないため断定はできないものの、少なくとも調査区においては9世紀後葉に集落が出現することから、この時期には旧鬼怒川周辺の沼沢地や流域にも開発の手が及んでいたと理解される。もとより集落の直接的な成因を知ることのできる資料は得られていないが、立地条件から眼下に広がる冲積低地に経済基盤を求めるることは自然であり、条里水田を主とした伴合的な土地制度からの変質という歴史的事実が背景にあると考えられる。

(齋藤 洋)

引用・参考文献

- 浅井哲也 1992 「茨城県内における奈良・平安時代の土器(1)」『研究ノート』創刊号 財團法人茨城県教育財団
浅井哲也 1993 「茨城県内における奈良・平安時代の土器(2)」『研究ノート』2号 財團法人茨城県教育財団
八千代町史編さん委員会 1987 『八千代町史(通史編)』 八千代町
八千代町教育委員会 1997 『一本木遺跡発掘調査報告書』 八千代町埋蔵文化財調査報告書第6集
建設省 財團法人茨城県教育財団 1999 『一般国道50号結城バイパス改築工事地内埋蔵文化財調査報告書』 下り松遺跡
油内遺跡』 茨城県教育財团文化財調査報告第145集
茨城県石下木事務所 財團法人茨城県教育財団 1999 『内海道遺跡 一般県道高崎岩井線現道跡地内埋蔵文化財調査報告書』 茨城県教育財團文化財調査報告第232集

報告書抄録

ふりがな	こじろううちいせきはつくつちょうさぬうこくしょ
書名	小次郎内遺跡発掘調査報告書
副書名	農業集落排水事業川西南部地区処理施設建設に伴う遺跡の発掘調査
シリーズ名	八千代町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	12
編集者名	山野井哲夫 斎藤 洋 小川将之
著者名	山野井哲夫 斎藤 洋 小川将之
編集機関	八千代町教育委員会 / 〒300-3592 沢城県結城郡八千代町大字苦谷1170 株式会社 地域文化財コンサルタント / 〒286-0201 千葉県富里市日吉台1-23-12
発行機関	八千代町 / 〒300-3592 沢城県結城郡八千代町大字苦谷1170
発行年月日	2007年(平成19年)9月28日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
こにみううたいせき 小次郎内遺跡	いばらき県ひたちなか市大原 茨城県結城市 やまとひたちねおあら 八千代町大字 あそひ、おはなはつたん 新井・八反田 66 他	08521	163	36° 11' 37"	139° 54' 21"	2006.10.25 ~ 2006.11.24	1,320m ²	農業集落 排水事業 川西南部 地区処理 施設建設
所蔵遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
小次郎内遺跡	集 落 跡	平安時代 時期不明	堅穴住居跡 5軒 仕様不明遺構 1基 土坑 34基 溝状遺構 1条	須恵器:瓶・甕・他 土師器:壺・塙・甕・耳皿・他 石製品:有孔円板・砥石 鉄製品:不明 瓦				

要 約（特記事項）

小次郎内遺跡は、鬼怒川の旧河道を眼下に臨む台地上に広がる集落跡で、調査は周知されている絶頂の南部において実施された。

この結果主に9世紀後葉～11世紀前葉の平安時代に営まれたことが明らかとなっている。

成果の特筆される点としては、5軒の堅穴住居跡のうち3軒においてカマドの向かって左側が平面方形に張り出して掘り込まれている構造にある。この構造は結城市の下り松・油内遺跡、八千代町一本木遺跡でも確認されており、堅穴住居内における空間利用を考える上で興味深い事例である。

写 真 図 版



小次郎内遺跡 空中写真

八千代町史（資料編 I）考古
八千代町史編さん委員会 1988 より

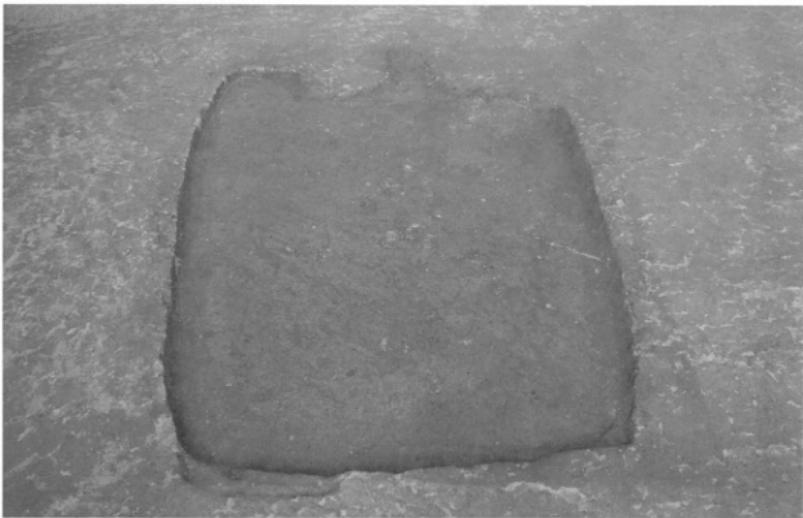


調査区全景 1 南から



調査区全景 2 南から

写真図版 2



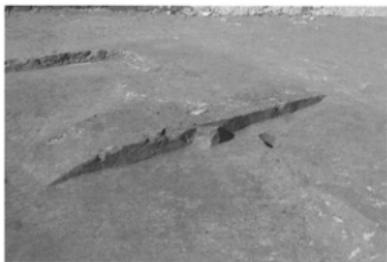
1号住居跡全景 南から



1号住居跡セクション 東から



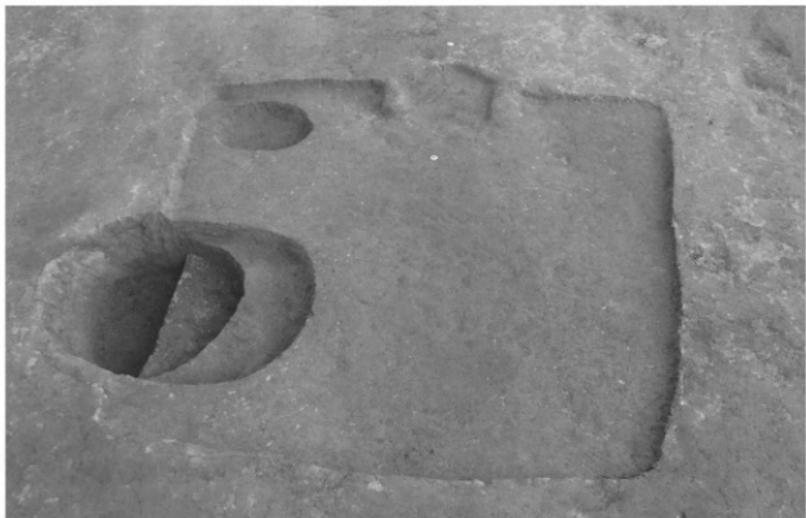
1号住居跡遺物出土状況 南から



1号住居跡カマドセクション 東から



1号住居跡調査状況 東から



2号住居跡全景 西から



2号住居跡セクション 南から



2号住居跡カマドセクション 南から



2号住居跡カマド遺物出土状況 南から



2号住居跡調査状況 南から

写真図版 4



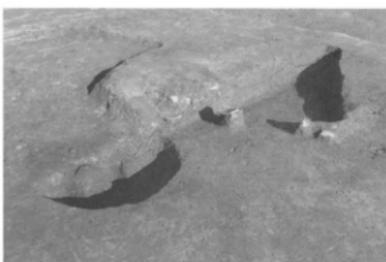
3号住居跡全景 西から



3号住居跡セクション 西から



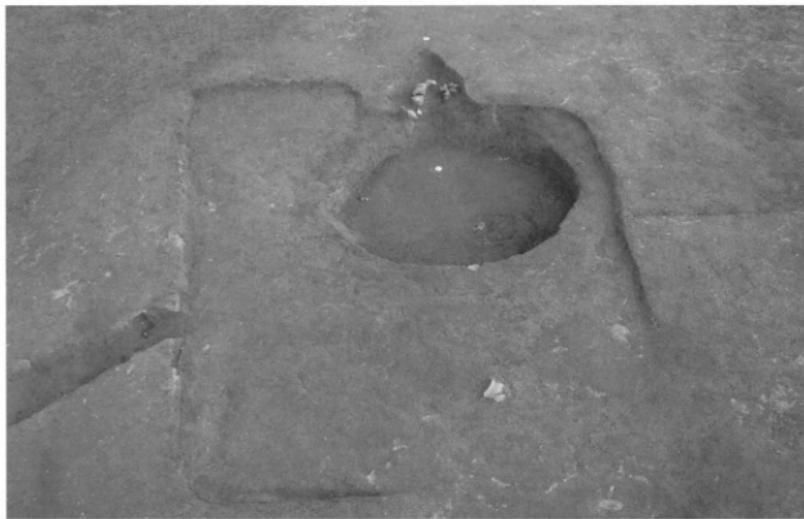
3号住居跡出土状況 西から



3号住居跡カマドセクション 西から



3号住居跡カマド出土状況 西から



4号住居跡全景 西から



4号住居跡セクション 東から



4号住居跡カマドセクション 南から



4号住居跡カマド遺物出土状況 西から



4号住居跡調査状況 西から

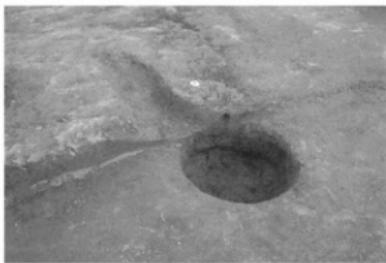
写真図版 6



5号住居跡全景 西から



5号住居跡セクション 北から



5号住居跡カマド全景 西から



5号住居跡調査状況 南から



5号住居跡調査状況 北から



性格不明遺構セクション 南から



性格不明遺構全景 西から



5号土坑セクション 東から



15号土坑セクション 東から



7・14・21・22・29・30号土坑 北から



土坑遠景(1) 南から

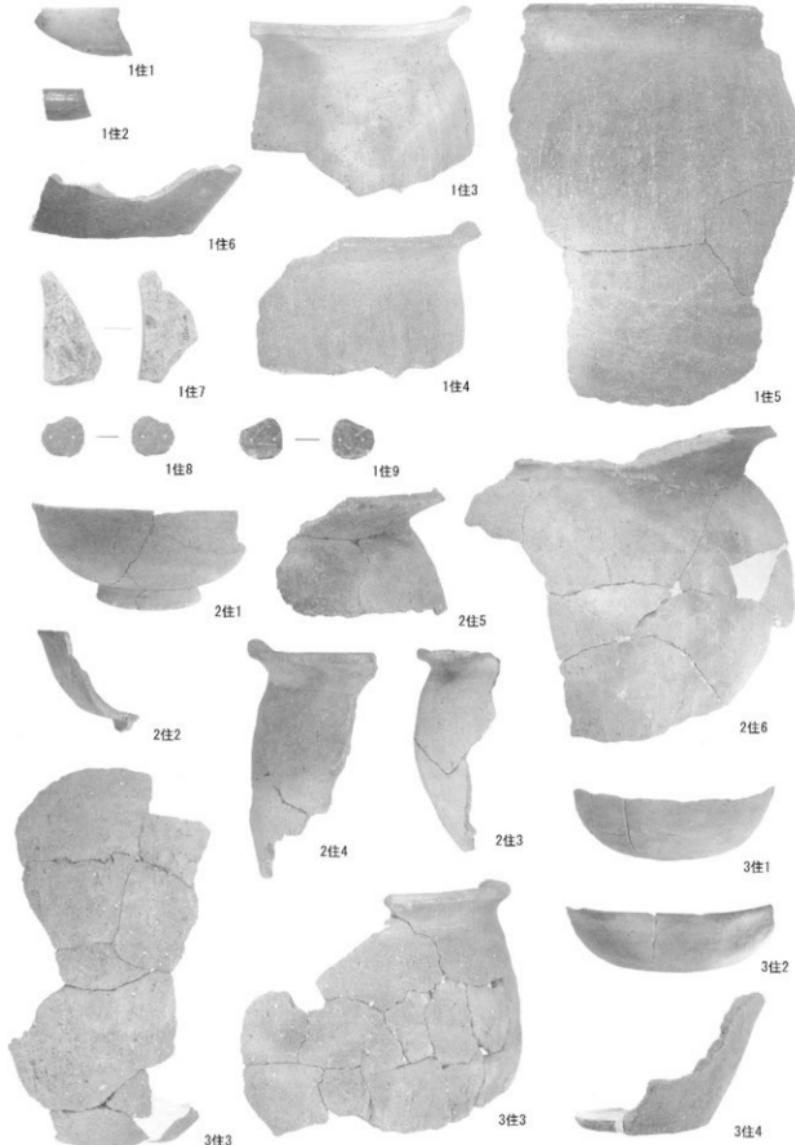


土坑遠景(2) 北から

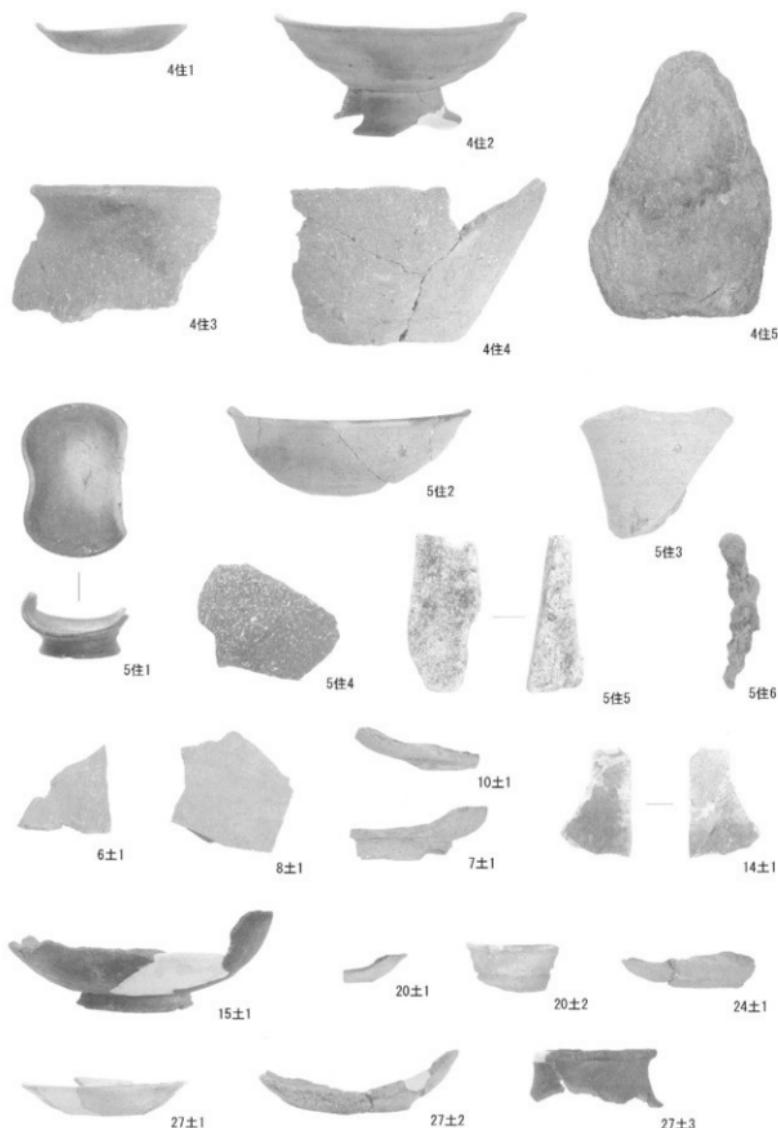


1号坑 西から

写真図版 8



1～3号住居跡出土遺物



4・5号住居跡、6～8・10・14・15・20・24・27号土坑出土遺物

写真図版 10



性格不明遺構 -1



性格不明遺構 -2



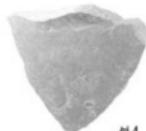
外1



外2



外3



外4



外5



外6



外7



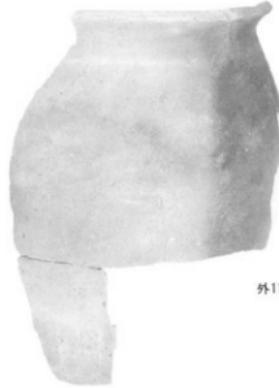
外8



外9



外10



外11

性格不明遺構、遺構外出土遺物

八千代町埋蔵文化財調査報告書 12

「小次郎内遺跡発掘調査報告書」

平成 19 年 9 月 28 日発行

編集 八千代町教育委員会

株式会社 地域文化財コンサルタント

発行 八千代町

印刷 社会福祉法人 東京コロニー コロニー印刷
